

吾は牧童  
夕暮は吹き  
すさぶ笛  
の音も聞  
くの人も少  
なきを恥ば  
なげられ  
喜ぶのみ

はしがき

こは未のとしの暮より亥のとしへ  
かけての作なり野調もこより人に  
誇るに足らずといへども吾胸いた  
めたるいとし子よご思へばうち捨  
てんここの情なうて茲にひと巻に  
拾ひあつめしばかりぞ

こを世に出すにあたりて親しき友  
平尾不孤金尾思西の二子かねもご  
ろに盡されしなさを深く謝する  
なり

亥の歳初秋

泣菫しるす

再版にしるす

去歳のくれこの集成りてはじめより打ち  
誦しけるに如何はしき句など少なからざ  
れば再版のをりに力めて改むべしと心  
に期しけるものをさて今となれば思ひし  
半ばもいせず未熟なりとは知りながら雖  
黄たとし兼ねるがいと多かるそのかみの  
興を損はんを怖れてに非すまたく吾才の  
進まざるによるなりかなしきやこの事

友の多くはたのくの稿の成りたる期を  
問ひ玉へり鶴鶴と絶句の大方は未と申詩  
のなやみ兄と妹百合花娘可笑しやは戌山  
雀獲物秋懷は亥他は酉の作このみはわれ

覺れ居れり斯ばかりの歌心高き人は引き裂きても捨てぬべし世に出すぞ中々に面伏なるべきを友は再び手にとり賜はんとにやあ、書を公にする人誰し願みて耻なしと言ひ得るやしるして戒となすなり

子の歳

おんらぎのなかば

目次

詩のなやみ	一
鶴鶴	七
冬の歌	五
古鏡賦	七
虎が雨	四
村娘	六
暮春の賦	一
鶴鶴の歌	三
兄と妹	四
大原女	四
盃賦	五
絶句十九篇	五
一、山雀	五

二	獲物	二
三	琥珀	三
四	雛祭	四
五	秋懷	五
六	雲	六
七	蟋蟀	七
八	星	八
九	鐘	九
十	鬢の毛	十
十一	紅涙	十一
十二	江戸河にて	十二
十三	玉腕	十三
十四	紅絹袖	十四
十五	螢	十五
十六	蟋蟀	十六

十七	夕	十七
十八	眞珠	十八
十九	桐葉	十九
二十	尼が紅	二十
二十一	遊子	二十一
二十二	巖頭にたちて	二十二
二十三	春の夜	二十三
二十四	關山曲	二十四
二十五	旅客に與ふ	二十五
二十六	壁にそめたる	二十六
二十七	鄙ふり	二十七
二十八	ふなうた	二十八
二十九	蟹少女	二十九
三十	粉屋の女房	三十
三十一	娘をかしや	三十一





燕の賦  
百合花  
秋の歌  
木曾川にて  
琵琶湖にて  
加古河にて  
楫保河にて  
華燭賦

一五  
一六  
一七  
一八  
一九  
二〇  
二一





燕の歌  
 百合花  
 秋の歌  
 木曾川にて  
 琵琶湖にて  
 加古河にて  
 掛保河にて  
 華燭賦

一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一

暮笛集

薄田泣董

詩のなやみ

遅日巻おそひまきの

塵ちりに行き

力ちから

あ

る

句く

に

く

る

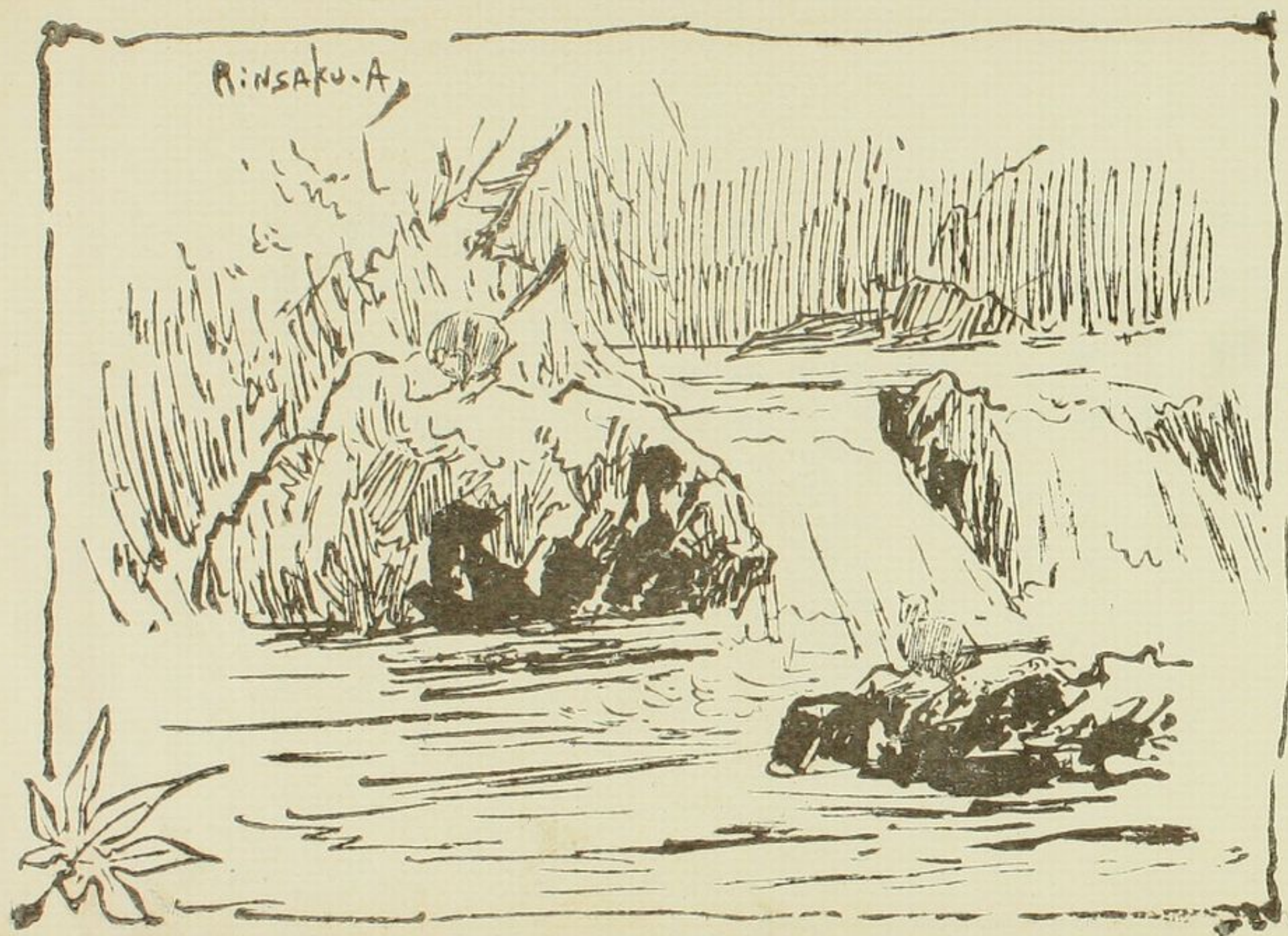
し

み

ぬ

消 <sup>き</sup>	よ	柱 <sup>はしら</sup>	情 <sup>せう</sup>	髪 <sup>かみ</sup>	さ
ゆ	し	な	無 <sup>な</sup>	ほ	ば
る	答 <sup>こたへ</sup>	き	き	つ	價 <sup>あ</sup>
簪 <sup>かんざし</sup>	に	搔 <sup>か</sup>	細 <sup>こ</sup>	人 <sup>ひと</sup>	詩 <sup>うた</sup>
の	似 <sup>に</sup>	く	緒 <sup>いと</sup>	の	に
み	た	が	を	子 <sup>こ</sup>	瘦 <sup>や</sup>
	る	如 <sup>ごと</sup>	は	を	せ
					て

二 <sup>に</sup>	あ	情 <sup>せう</sup>	石 <sup>いし</sup>	深 <sup>ふか</sup>	詩 <sup>うた</sup>
羽 <sup>は</sup>	ゝ	あ	を	く	は
の	田 <sup>た</sup>	る	包 <sup>つつ</sup>	沈 <sup>しず</sup>	大 <sup>おほ</sup>
一 <sup>いち</sup>	餌 <sup>え</sup>	え	子 <sup>こ</sup>	人 <sup>ひと</sup>	真 <sup>ま</sup>
錢 <sup>せん</sup>	は	堪 <sup>た</sup>	の	に	珠 <sup>たま</sup>
か	あ	へ	い	聞 <sup>き</sup>	狩 <sup>かり</sup>
	け	ん	ふ	く	
	る	や			



わ	世*	わ	こ	わ	こ
れ	に	れ	ゝ	れ	ゝ
唯 <sup>ただ</sup>	秀 <sup>ひ</sup>	手 <sup>て</sup>	に	膝 <sup>ひざ</sup>	に
物 <sup>もの</sup> ひ	少 <sup>すく</sup> 才 <sup>さい</sup>	詢 <sup>もと</sup> を	少 <sup>すく</sup> 有 <sup>う</sup>	學 <sup>まな</sup> 折 <sup>ま</sup>	秀 <sup>ひ</sup> 風 <sup>かぜ</sup>
狂 <sup>きやう</sup> と	女 <sup>め</sup> な	ら	女 <sup>め</sup> 情 <sup>じやう</sup>	ば	り
り	なく	ん	り	ん	て
	く	に	て	に	あ
			れ		れ
					の



雨垂柏子  
 句を切りて  
 無才を知るよ  
 今こゝに

鶺鴒

鶺鴒雌雄下りて樹下に遊ぶ。人あり石を投げて追はんとす。樹下に立ちてこの篇をつくる。

止めよ若者石とりて  
 かの鶺鴒を追はんより  
 拳に巳が額を打て  
 禍鳥其處に巣くへるに  
 小石踏み踏み瀬をわたる  
 無心の遊び罪なふか  
 さば先づ垣に花を摘む

隣りの稚兒を蹴るべきに。

雌雄尾をふる首をふる

歌ふ姿を羨むか、  
往いて木暗に夫と語る

君が妹を脅かせ。

花は踏まれて、躑に

葉粉ちるも微笑むを、

人は行きずり、故もなく  
鳥叱らでは過ぎ得ざる。

吾あに是に言よせて、

大鳥しるを好まんや。

鳥に情なき人の子は、

遂に隣と関がでや。

やめよ若者かへるさに、

妹訪ひよりて語りみよ、

君有心者と喜びて、

両の腕を肩に委ねん。

冬の歌

冬は来れり山越えて、

里に入りたる旅人が、

散り透く森の下道に、

鹿の角得たる幸聞きて、

樵夫空兵衛朝明を

山に駆けたる噂あり。

薄き日影に茶の花の  
薫するほごり猪を割き、  
武者物語ひもといて、  
矢開るがく調に乗り、  
鼎の冷氣に驚くも、  
精凝る冬の可笑味ぞ。  
夜が子刻の鐘鳴りて、  
市姫領を引き去れば、  
小狐たりて下京の  
月に冴わたる霜をふみ、  
鳩もやあると唯獨り  
數珠挽寝たる戸をくゞる。

秋野に散りし歡樂も、  
今は團樂の室に入り、  
圍爐裏のほごり釜の前  
あら聞け嬉々と興がりて  
芭飛びかへる鶴鷄  
耳聞忍び得ざらんよ。  
獵夫も言へり幸負ひて、  
雪路歸る夕ばかり、  
戸に凭る妻の愛嬌を、  
嬉しと見しは無かりきと。  
斯くてぞ冬は静まりて、  
年の喜射の幕閉づる。

古鏡賦

斧に倒れし白檀の



高き香森に散る如く、  
薄衣とけば遠き世の  
ふかき韻ぞ身に逼る。  
向へば花の羽衣の  
袖のかほりを鼻に嗅ぎ、  
叩けば玉の白金の  
冠冕を弾く響あり。

こは古鏡往にし世に、  
額白かりし上臈の  
戀得で髪を裁ちし時、  
投げてしもの君も見よ、  
横さにかゝる薄雲の  
曇れる影も故づきて、  
頼もしい哉祭壇の

聖き姿をうち泄ふ

千載鏤の鈍ばみきて、  
冷れたる面にさはりみよ、  
花くだけちる短夜を、  
瞳子凝らし、少女子が  
玉の額をながれたる  
熱き血汐の湧きかへり、  
春の潮と見る迄に、  
昔の夢の騒ぐらし。

亂心地の堪へざるに、  
泡咲く酒の重だに、  
濁ける舌にふくませよ、  
祇に抱いて人知れず、

深野の末に踏み入りて、  
妻覓と見るか物狂、  
背叩いて面撫で、  
有心者得ぬと歌はん。

宿る人霊のひらかば、  
怨みある世の夢がたり、  
名に戀しれど嫉みある  
女神女子に幸貸さず、  
人の情の薄かるに、  
細き命をつなぎわび、  
泣いて逝きたる上臈の  
秘めし思を悼まんか。  
あ、幾度か、若き身の。

狂氣をこそは望みしか、  
今ど興あり、怨みある、  
其世の紀念、古鏡、  
これ吾襟に藏め得ば、  
よし京童は嘲るも、  
世の煩らひを打ち捨て、  
智覺なき身と化しもせん、

なう古鏡このあした、  
汝を抱いて嘆く身の  
述懐は夢か、蜃氣樓、  
それにも似たる幻か、  
孰れ覺むべきものならば、  
儘よ短かき晝の間を、  
飽かぬ陸にあこがれて、

悲しき闇を忘れまし。

虎が雨

大磯の虎女曾我十郎に別る涙變じて雨となるされば五月二十八日多く雨ふるをかく名づけ來れりわれ一とせ此日此地をよぎりてよめる

胸かはきたる人の世に、  
此はなつかしや虎が雨、  
われ名を聞いて恨ある  
世の情なさを忘れたり。

磯飛ぶ可きかの畔に、  
歌うてかへる子を呼びて、  
思情や湧くと觸れてみる  
手心ささつくさぐらばや。

そは野の草に注ぎても、  
花くれなゐに吹くちふを、  
里の女童年二七、  
若し戀ひすやと思ふ故。

あかき涙のこほりたる  
情の雨と名を聞けば、  
光りさびしきこの夕を、  
髪もしとくに染よかし。

額におつるしたゝりに、  
濁ける舌を濡らせて、  
色香なき世の煩ひを、  
しばし忘れん心なり。

村娘

春ゆく夕白藤の  
花ちる蔭に身をよせて、  
泣くは行末さだめなき  
世のならはしを思ふもの。

知らずや薄き花びらに、  
春の目を焼く香あり。  
見すやか細き鬢莖に、  
かなへをあぐる力あり。

路せき走る旅の人、  
しばし木暗に立ちよりて、  
冷たき胸を叩く手に、



R Akamatsu.

なご若き身を抱かざる。

誰に語らん和肌わだかまに

指ゆびをさはれば此こゝは憂うれしや、

潮うしほに似にたる胸むねの氣けの

浪なみとゆらぐを今いまぞ知る、

春はる經へてさぶる酒さけ饗あひには、

色いろ濃のき酒さけの湧わくものを、

瘡かさせし腕うでに血ちも冷ひねて、

苦くき涙なみだをぬぐふかな。

これは習慣しゆはん茲こゝにまた、

湖うみら衣服いふくを裁たちきれど、

もろき命いのちをかもひみて、

たゞむに惜しき染小袖

神と情ある人の子に、

盲目をゆるせ、ゆく春の

長きうれひを眺めては、

か弱き胸の堪へざるに、

暮春の賦

冷たき土窟に醒されて、

若紫の色深く、

泡さく酒の盃を、

吾唇に含ませよ、

暮れ行く春を顛きて、

細き腕の冷ゆる哉、

心周章つる佐保姫が、  
旅の日急くかこの夕  
人は夕飯に耽る間を、  
花をここへに散りこぼれ、  
痛ましい哉春の日の  
快樂も土にかへりけり。

垂るゝ若葉の下がくれ、  
亂れて細き燈火に、  
瞳凝らして見入るれば、  
夢にぬれる葉の粉や、  
花なき今も香を吹いて、  
残れる春を焼かんとす。  
足にさはりて和らかき

名もなき草の花ふみて、  
 思ふは弱き人の春、  
 賊粗き運命に、  
 戀の常花ふみさかれ  
 憂しや、逝く日の無くてかは、  
 暗まれば薄き彼方より、  
 常若に笑む星の影、  
 智恵ある風にきらめきて、  
 夏來と知らず顔付よ、  
 今冷やかに見かへして、  
 吾嘲けるを堪へじな、  
 耳をすませば薄命の  
 長き恨か、暗の夜を、

くだけて落つる芍薬や  
 吾も沈める此夜半を、  
 毒ある花の香に酔ひて、  
 消えて人靈と化せん哉、

かゝる静寂をことならば、  
 心ある子がものすさび、  
 顔なく絃にふれもせば、  
 弱き我身はくだけても、  
 琴ひく君が胸の上へ、  
 涙のかぎりかけましを。

あゝ恨みある春の夜の  
 はそきあらしに熱情の  
 焰な消しぞ、木がくれに、

のがれて急ぐ佐保姫が  
旅路を阻ふ蟲術の  
息吹とはかん血汐なり

鶺鴒の歌

吹草祭の日は寒く、  
鍛治が女房友もなく、  
ひねもす窓に居凭る時、  
軒端づたひにこそつきて、  
掛菜をそゝる音きけば、  
鶺鴒来と知られけり。

樵夫の娘爪先を  
爐にあたゝむる雪の朝  
吹嘘聲を近く聞き

情郎戸に呼ぶと駆けいでよ、  
可憐や軒に立ちくらし、  
凍江て泣きし談あり。

吾今朝山に分け入りて、  
谷の小陰に唯一羽  
鋭き嘴に萱さきて、  
巢をあむ振を認めしが、  
かへりて妹にさゝやくに  
猶吾聲をはかりぬ。

なう鶺鴒木づたひに  
ひとり興がる歌きけば  
吾夏の日の野の鳥の  
誇る羽振も忘れはて



箕蟲啄みて飛んでゆく、  
細き姿をかいまみる哉。

兄と妹

「……ここへに照りわたる天つ日の  
もとに御身の幸福にあるべし、然り  
われこそを祈るべきぞ」

兄

冬の日背をあたゝめて、  
南の窓のたゝすまひ、  
胸和ぐる心地すに、  
來すや暫しもなう妹。  
厨女行いて君ひとり、  
燭細るまで針づとめ、  
今朝人訪はず手とりて、  
心なぐさに歌はんか。

妹

やさしの君が語かな、  
朝食の皿注ぎたり、  
春着の袖はなは裁たず、  
しばしは髪にかたらんか。

厨女お竹行いてより、  
抱腹笑聞さねねど、  
君が情ある言の葉に、  
爰慰むる妹が身ぞ。

兄

世に可愛しきは妹の  
針とる傍に侍りて、

誦し出る戀の物語  
調子剛しと指ざれ

そは此作者 目をやみて  
妹が襦袢白茶地の  
丁子色 柑子色にまがへばと  
軽く手をうち笑ふとき

妹

世にかしきは吾兄の  
「縁」音する、行き見よと  
手にとる書は讀みやめて  
我顔色をながむるに  
そは梁走る小鼠の

餅ひく音よ心せで、  
早讀みつけとうち笑みて、  
君が腕にすがるとき

兄

春の夜ふかく月影に、  
庭の樹間をさまよへど、  
歌よむ興もおこらぬに、  
琴ひけ妹とうながせば、

アイと琴とり柱をたきて、  
奏でいでたる一曲の  
あまりに調の切なるに、  
睫毛うるみし夜もありき、

妹

琴ひきさして見かへれば  
火影にそむき君泣くに

「何悲しき」とよりそへば  
「感極る」と忍び音に。

「何故」「調よきに」「拙なるを  
せめて叱れ」と耻らへば  
無言に胸をかきいだき  
哀れや夜たゞ寝でありき。

兄

夏朝早く水くむと、  
髪を抱いて走りしが、  
戸に泣く聲に駆けゆけば  
「許せが髪砕いて」と。

砕くも儘よ唯泣くな  
髪には惜しき涙をと、  
言ふに可憐やしやくりあげ  
すかりて泣きし人は誰れ。

妹

秋の日小犬かくれきて、  
手馴の兎捕られぬと、  
歌をもよまで窓に凭り、  
面杖ついて歎けるを、

朝菜つむとて圃にゆき、  
寺の葉かげに耳を見て、  
抱きかへるに兄が身の  
額づき謝せし日は何日か。

兄

笛子とりこんと夕闇を、  
北の一間に走りしが、  
「幽霊耳ひく守りて」と  
髪ふりみだし叫べるに、

われ燭とりて駆け来れば、  
「憎や此は琴」恐ぢて見し  
姿耻ぢてか、口細め、  
燭吹きけして隠れしよ、

妹

朝道遙の其の一日、  
葡萄の棚の下かけに、

戀歌よまんと勇みたち、  
柏子とりゆく勢を、

可愛しや、石に躓きて、  
眉毛ひそませ怒るとき、  
われ葉がくれの一房を、  
摘みて詫にと勧めしよ、

兄

昨夜、姫桃ちりこぼれ、  
風香をのする春の日を、  
丸鬢姿あはかにて、  
君窓による夢みたり、

七、春経たる樟樹の、

若葉そろうて立つ如く、  
君髪づらの撓むまで、  
髪ふさやかにたけよりな。

妹

いはい巫覡殿らしく、  
彼古人に説くに似て、  
夢といつはる吹聴語、  
鼻うそやぎに其と知る。

昨日むすびし蝶々の  
はや解けがらの風見ても、  
兄よ再び女房の

兄

心化粧はいはすあれ。

世に名も高く響きたる  
秀才の友にめあはせて、  
げにふさはしき花妻と、  
詠ひはやさん日は何日か。

君才敏く情切に、  
顔赤らめな光ある  
廣き書齋の鍵とるに、  
何耻かしき身ならんや。

妹

われ身弱くて年若く、  
唯世にいで耻あるを、  
頼青白き博士等の  
ひかる瞳子に堪へんや。

希くはいつまでも  
君よむと文机に  
まどろむ夜半を衣かけて  
手をとる筆を去らしめよ

兄

袖に秘めたる手を見せよ  
これか寒き日を  
可憐や獨り米磨ぐと  
煤け厨屋に水釣りて

あゝ願はずや春の夜を  
金屏ひくき廣前に  
藤紫の袖をりて

なよび姿に舞はんとは

妹

否よそにして遊ばんは  
家に勞るゝ身に若かず  
興ある旅に行かんより  
つらくも吾はかへらんか

花賣娘名はお京  
都に三歳許かれて  
「うき夢見ぬ」と泣くみれば  
あはれや鬢もほろくと

兄

知るかまことに世は然り

君葉がくれの花の身を  
いかに手折りて小狐の  
野道におくに忍びんや

緋桃白桃そのかげに  
愛と誠の神やどる  
無何有の郷の世にあらば  
君ゐて其處に走らんを

妹

世に無何有なく絶えてなく  
修羅永劫についかんを  
せめては兄と唯ふたり  
生れし家に止まらん

見よ鳩ふたつ飛びあぐみ  
隣りの家根にかへりきて  
喜ひ鳴くよ巢は空の  
木よりゆかしと知るや君

兄

殘んの城と立こもり  
誠をたのひ團欒をも  
おはや無愁の大浪に  
まかれも行かん人は此處

蛇にまかれて悲鳴する  
弱き雀に似たらすや  
あゝ石とりて誰かよく  
かの鎌首をくだかんか

妹

友をうしなひ唯ひとり、  
夕ぐれ坂に唯き細る、  
若き羊もかくばかり、  
沈みて物を思はんや、

更に興ある事様に、  
君が思慮をめぐらせて、  
頓の可愛味罪もなく、  
共に笑壺に入らしめよ、

兄

見よ、この蛇の行くところ、  
悪しき臭氣に氣は汚れ、

善き美しくしき、正しきは、  
背さしむけ逃れ去る、

唯闇につく密事、

盗み、詐り、小賢こそ

侮り、驕り、似而非者の

偽善ぞ彼が跡ふむよ、

妹

妻もつ水夫は遠く去り、

歌聲細る島陰に、

日暮れて落つる夕汐も、

かく悲しげに見ゆんやは

兄よ、御身が顔色の、



あまゝり病者に似たらずめ、  
肌さらすな、朝北の  
やゝ庭の樹に吹きたつに。

兄

汚れし毒は血に入りて、  
世はさながらの地獄なるを  
脆き身ひとり影もなく、  
涙の谷にゆかんより、

ひしる鷲とも身を化して、  
腐れはてたる人の子の  
腸裂いて、恨ある  
工匠の手をも咀はんか。

妹

歎きの附子矢身をはみて、  
人ね堪へんや、請ふ泣くな、  
われ乙女子の術知らず、  
慰めもなく迷ふのみ。

兄よ、ほゝゑめ、門の戸に  
といと音せば何とする、  
日影も高くさし照るに、  
爰に歌うて畢らんか。

兄

歌ふと聞けばなつかしな、  
歩み倦んずる旅の日に、  
樹蔭見るより嬉しきは、  
「悪なる」歌を思ふとき。

よしさば歌へ、去年の春  
野に興を得て走り書  
「妹許ゆけ」と、龍犬の  
首にむすびしかの歌を。

妹

われもそをこそ、友袖子、  
一口袂にさぐりみて、  
美ましやと目を細め、  
三たびも誦してかへりしよ。

君なぐさめん戯れぞ、  
誦し出る調のわなゝきて、  
よしさゝ啼に似たりとも、

ゆめな笑ひぞ、吾兄よ。

(妹歌ふ)

古酒甕の  
裂け目より、  
したたる露は、  
巳が身か。

甘しと嘗めて、  
稱ふれど、

誰盃の  
ものとせず

爰に自然と、  
妹の、

吾<sup>わが</sup> 笛<sup>ふえ</sup> と 君<sup>きみ</sup> たち<sup>たち</sup> ち<sup>ち</sup> て、  
 妹<sup>いもうと</sup> と 吹<sup>ふ</sup> いて 見<sup>み</sup> る。  
 若<sup>わが</sup> 葉<sup>は</sup> の 蔭<sup>かげ</sup> に、 尋<sup>たず</sup> ね 來<sup>き</sup> て、  
 あ ま り に 音<sup>ね</sup> の け び し き に、  
 世<sup>よ</sup> の 市<sup>いち</sup> 人<sup>ひと</sup> の 心<sup>こころ</sup> に は、  
 ふ と 吾<sup>わが</sup> 胸<sup>むね</sup> の ゆ る ぎ た る。

息<sup>いき</sup> 吹<sup>ふ</sup> き こ め て、 な ぐ さ む に、  
 裂<sup>さ</sup> け し 片<sup>かた</sup> 拾<sup>ひろ</sup> ひ、  
 春<sup>はる</sup> の 日<sup>ひ</sup> 小<sup>こ</sup> 野<sup>の</sup> の 遺<sup>い</sup> 途<sup>と</sup> に、  
 思<sup>おも</sup> を 波<sup>なみ</sup> に、 消<sup>け</sup> さ ま し を、  
 ひ し ろ 背<sup>せ</sup> に いて、 海<sup>うみ</sup> に ゆ き、  
 深<sup>ふか</sup> き 慰<sup>なぐさ</sup> め の な か ら ん か。

かの  
衣の  
舞を  
舞ふ

目は  
大海の  
球に似て  
光りす  
輝けり

足は  
花の  
ふみて  
鹿の子  
の如く  
ほる

艶なる  
君は誰れ

笛なげ  
物狂ちて

得しよ  
不断に  
世に見ぬ  
幸を胸に

あゝ妹よ  
縁あれば  
かくは  
手とり

あゝ妹よ  
來ん世にも

一 つ 契りの  
冠をこそ

笛とりあけて、  
吹きいでぬ、

調にあり、  
朗々と

見よ美くしき  
眉の毛に、

歡喜の色は  
あらはれぬ

君喜べり、  
何かまた

世の憂ひを、  
思ふべき

無才ならんや、  
われはよく、

妹なぐさむる  
すべをしる

無才ならんや、  
われはよく、

妹なぐさむる  
すべをしる

大原女

行方語れな、大原女

齒の手に何盛れる、  
京の旅人渴けるに、  
桃かさば君與へすや。

君が跡ふむ龍犬の、  
名は何「斑」と善き名なり、  
斑も木かけの欲しと見る、  
しばし来て坐せなう少女、  
手籠木にかけ野に伏して  
鄙語ひとつ優にこそ。  
さば都女の數寄こむる  
鬢の風情をかたらんか。

盃 賦

“Sylvan historian, who canst thus express  
A flowery tale more sweetly than our  
rhyme”. — Kents.

これ語り部か、岩窟に、  
隠者の背を見る如く、  
深く鉗めどおのづから、  
胸にをしふる物語  
指にいだいて希有がれば、  
裾に秘色の鏝うきて、  
常珍なる香を吹くに、  
此は逸品と今ぞ知る。  
剪裁かをる夏の夕、  
燈火かやく新室や、  
耻を含める花嫁が、

紅の香高き唇に、  
汝か緑すこし打ち觸れて、  
胸に湧きづる歡樂の。  
高き潮にほも堪へず、  
まみ細むるを見ざりしや、  
厨女さめて寐惚顔  
鼠子追ふも絶ねたるに、  
興得て律を探らうと、  
四更まだ寐ねぬ詩人の、  
火影に汝を需め得て、  
したり顔せし日は何日か、  
そは女の神に額づきて、  
戀歌よむ子と吾も知る。

秋の夜月の高き頃、  
壘道問ふと庵に入り、  
戦を語る落武者が、  
はや殿軍も河越はん、  
さらばと長き矛とるに  
今一つぎと老僧の  
行手の幸を祈りつゝ、  
汝捧ぐるを見ざりしや、

友戀ひ病めり願くは、  
木暗に眠る夢の間を、  
汝が肩越しに溢れては、  
泡さく酒の車だに、  
疲れし病に注がせて、  
酔醒訪はぬ時の間も、

ひとり興ある物狂  
古るき愁を捨てしめん

あゝ盃よ永き世の  
鏝を帯びたる汝底に  
世の歡樂を染めいでよ  
秘密をえがく永劫の  
遠き光を透かしみて  
吾わが命のいまさら  
意ある如きに驚いて  
獨り瞳子をこらすなり

絶句 十九篇

山雀

“All that ever was

joyous, and clear, and fresh, thy music

doth surpass.”

— Shelley.

鳥鳴く。柿の實紅をさして、  
夕日に浴びたる上枝高く、  
首ふる、尾をふる、興に入りて、  
歌ふよ、山雀律も優に、  
秋姫今日より峯を下りて、  
麓の林に木の實盛れよ、  
晚餐のかへるさ道を遠み、  
翼の倦まんも不憫なるに、



道ゆく旅人こゝに來たり、  
赤丹穂に見る額もわけず、  
扱なは肩の荷解かであらば、  
野守よ行手の路を貸すな、  
妙なる歌にも疎き耳は、  
善き子の頭ににれかるべしや、

獲物

「若うて仲間と戀に閱ぎ、  
少女が日撰に時を期して、  
獲物を占にと銃を荷ひ、  
秋山木ふかく勇みゆきぬ、  
葉かげに角みて狙ひよれば、  
こはこれ寝る雌の夢や守る、  
目の色うるみて雄鹿立つに、

戀ふれば斯くかと打たで去れり、  
少女子迎へて熊や射たる、  
敵は粗毛の猿を得ぬと、  
問ひよる顔みて銃を折りき、  
語るは空兵衛老いし樵夫、  
禿げたる頭に露を浴びて、  
曉今なほ山路はしる、

琥珀

琥珀にかくる、羽蟻が身の  
きたなき縁を逃れいで、  
透き入る眞玉の宮に眠る、  
不滅のいのちを知るか君は、  
都に富める子綺羅を着ても、  
猶身に榮ある思なしと、

ひねもす南の窓にもたれ、  
可憐や憂身を恨みなげく。  
あゝ君樹蔭の草をふみて、  
若きが手をとり語り行けな  
さば世に愛こそ君をまもる、  
琥珀の城とも思ひ知らん。  
何名を煩らひ智恵にこがれ、  
敗るゝ縁に身をし委ねん。

雜 祭

青磁に亂るゝ糸柳の  
若芽をきざめる片枝がくれ、  
かざれる雛の玉の殿を、  
誰が子か仰いで獨り笑めり、  
紫玉をちらせる金の冠。

龍頭を彫りたる劔太刀の、  
花なる御衣を透いて見ゆる、  
壯なる姿を君や戀ふる。  
春知りそめたる糸柳の  
爛れて見ゆるも哀れなるに、  
緋桃を浮けたる瓶子あけて、  
沈める思に注いで見んか。  
彌生のみ空と若き命  
いづれか白日の夢に似ざる。

秋 懷

山森畑寺遠き牧場、  
落つる日ゆく雲歸る樵夫、  
就れか一種の銚を帯びて、  
暮天の繪様に趣味を見ざる。

今句を得んとて路に立てば  
 陣觸聞いたる武者の如く  
 心利騒いで得堪へざるに  
 田の畔踏みきて草に伏せり  
 若し夜の幕の落つる迄も  
 歌得で小道に迷ひ居らば  
 無才ぞ牛飼ふ群に入りて  
 明日より文集手には取らず  
 野がへり裂けたる笛を吹くも  
 詩を得ぬ不興に比せば如何に

雲

遠島がくれに走る舟の  
 波間にうするゝ真帆と見ゆて  
 黄色に染みたる放れ雲の

秋の日風なき空をわたる  
 見よ今朝明遠く飛びて  
 目路さす彼方に細り行けど  
 夕暮島根に雲はかへり  
 落つる日抱いて其處に眠る  
 知恵猶といかぬ大空には  
 物皆はかなく人は見れど  
 放れば跡なき浮雲にも  
 常盤に絶えざる命ぞある  
 あゝかの漂上ふ天つ領巾に  
 此世の秘密を染めて見ばや

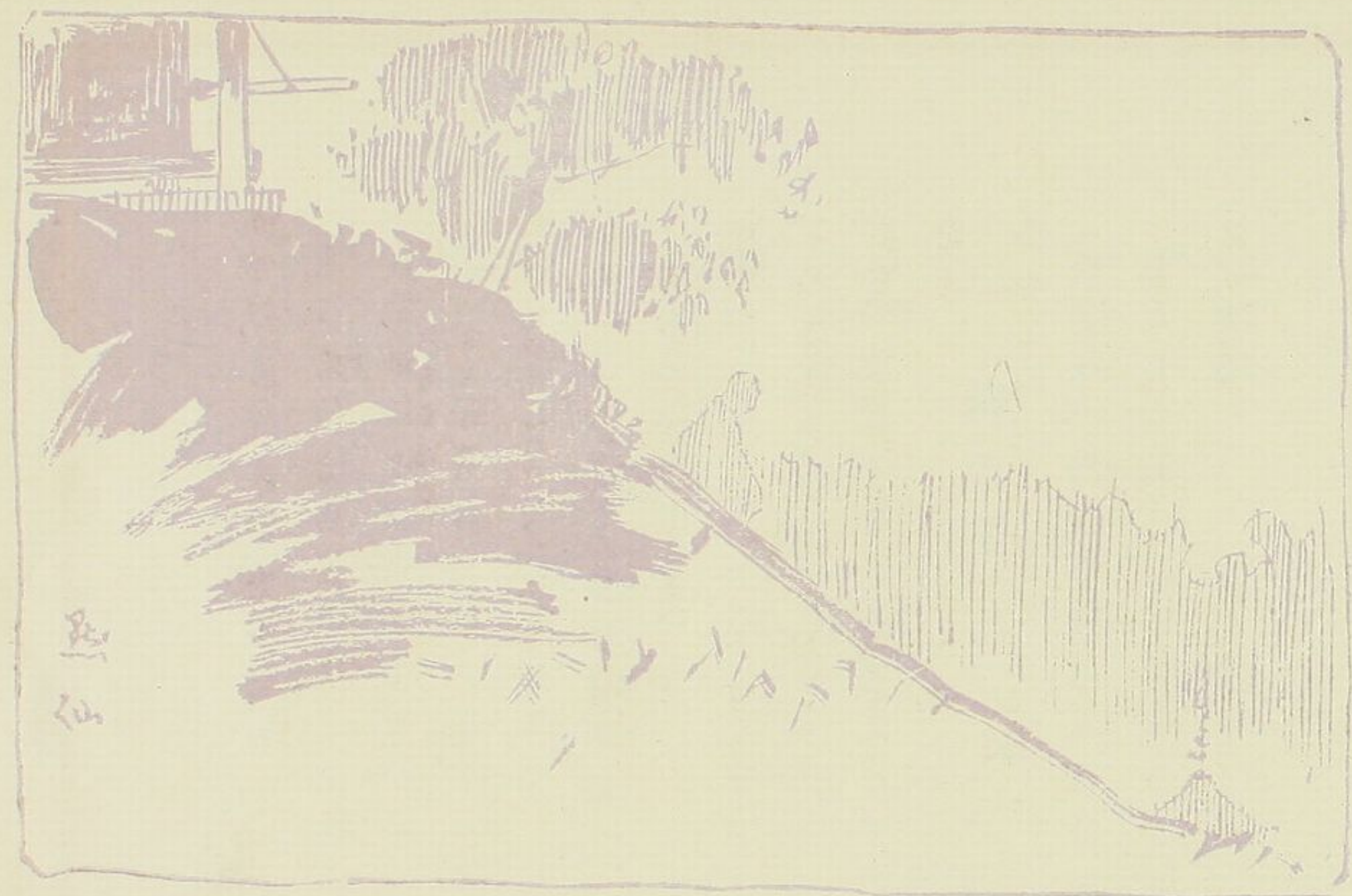
蟋蟀

"The poetry of earth is never dead."  
 — Keats.

姉女眠りて厨屋さむく、  
小鼠古巢にこもる夜半を、  
冷ね行く窺に友もあらで、  
節々のづからに蟋蟀鳴く。  
かすかに答ふる己が歌の、  
愉快か興がるいろも見ねて、  
眉の毛ふれるよ、鳴きつ飛びつ、  
無心のたはむれ姿優に。  
更け行く半夜の影を惜み、  
自然の快樂の得たさ見たさ、  
燭とり窺ふ吾を何と、  
此は又おどろき飛びて行くか、  
さば今隠れむ、またも細く、  
唱へよ窺に君が歌を。

星

雲井の流れを吹き落して、  
天風高嶺をわたる時も、  
揺れず流れず星は立てり。  
誰れ今自然の力否む。  
神代の闇けに星はうまれ、  
氣遠き世界を下に踏みて、  
戦ひ勝ちたる武者の如く、  
千載きららかに空にかゝる。  
今問ふ理想は消ぬべきか、  
見よ彼の悪魔の走る所、  
顔青ざめたる瞳子うする、  
地上によろばひ呻き居るよ、  
魔か名を「我」といふ然らざれば、



詩人ぞかくやは憂きに泣かん

鐘

欲覺聞晨鐘  
令人發深省  
——杜甫

鐘鳴る九日月は落ちて、  
 暗闇領する八となれば、  
 四隣の寂寞人も堪へで、  
 鐘樓にのぼるか歩み遅々と  
 鐘鳴る夜の神時を知りて、  
 信實人眠れる門に立てば、  
 驚さかくるゝ人靈木魂、  
 歸途にまよふもかゝる時か、  
 うてうて再び三度四度、  
 三軍根城にせまる如く、  
 鐘の音般々ひきわたる、

天地應トてどよむ時ぞ、  
身はこれ詩人獨り覺めて、  
夜すがら默思の興に入らむ。

鬢の毛

か細きはつれも胸にまきて、  
人の子とらへん方ありや、  
梳ればかすかに肩をうちて。  
黒髪八尺櫛にながる。  
その名は「縁子」遅日々に、  
花笑見うとて門に立てど、  
戀ふる子あはれむ色もなきに、  
袖口噛みては泣いてかへる。  
雨の日ひねもす獨りとちて、  
心にゑがくはなよび姿

燕も巢に入る夕となりて、  
むかへば悲しや眉を白み、  
つれなの鏡を壁になげて、  
しのびに泣くかな薄き縁を

紅 涙

歩めば橘袖にこぼれ、  
かへれば姫百合裾に折れて、  
往來憚かる山路來つゝ、  
嗚呼また思ふは妹が上か、  
巖根にこもれる荆棘がくれ、  
いならぬ香を風にしめて、  
隠かに萎るゝ花の如く、  
怨むもかひなき己が身かや、  
或こしにさしいる朝日影に、

ひすべは悲しや、吾涙の  
唐紅なる色にしみて、  
眞玉手さしかへ眠る夜半の、  
亂るゝ髪をも染めぬべきに、  
色なき石のみぬれて見ぬ

江戸河にて

緋雲紫長くながれ、  
落つる日黄ばめるこの夕暮、  
おもひきある哉筏浮けて  
舟人河瀬に軽くさせり、  
静けき夕の心やりか、  
歎乃一ふし歌ひさして、  
笑めるよ、若い子水馴棹に、  
くだくる小波をあとに見つゝ、

民皆煩らふ空のもとに、  
自然の愛子か君は獨り、  
赤丹穂に見る顔の色に、  
心の平和さやに知らる、  
詩人如んで名残つきず、  
暫しはたゆたへ、やよや舟子。

玉腕

朝明一群鱗しるく、  
浅瀬に走せ散る鮎と見仁て、  
まとへる綾羅色をわかみ、  
透いても見ゆるや玉の腕、  
葉がくれ桃の實探りよるか、  
人目を煩らへ腕見ゆと、  
母戸に呼ばへる聲を聞きて、

垣間見とれしを誰と知るか、  
夕空虹の環横にきりて、  
遠雲がくれにわたる鷲の、  
猛なる翼もむしろ捨てん、  
眞玉をのべたるかの腕に、  
物もひ煩らふ額をよせて、  
樂しき夢路をたどりなば、

紅絹袖

長鬣風ある放れ駒の、  
牝馬の遠目に狂ふ如く、  
軀の熱情一つによりて、  
春の日ひねもす君を思ふ、  
戀する心の常と知れど、  
目に入る自然の物に比せば、



劣るよ若い子母に恥ぢて、  
 逢ふ期もをりく時を後る。  
 人目や頬らふ雲に似たる  
 やさしき乳房を頬にもよせて  
 夢路の美酒くまんのみを、  
 美ましいかな色を若み、  
 玉なる肌はだへに香かほれとてや、  
 腕うでにまかるゝ紅絹べにぬいの袖そでの。

螢

さゝらぐ小河の水際ぢかく、  
 螢か柳のかけに凭りて、  
 暗の夜身ひとり照りつ消ゆつ、  
 可憐や苦思も知らず顔に。  
 静けさ木の暗幕くまひよりて、

思もなき身の夜更けぬるに  
 か細き火影かほに照らし見るは  
 下葉の雨を掴まんとてか。  
 自然の住居はいとも清く。  
 自然の遊びはいとも樂し。  
 自然の住居にひとり遊ぶ。  
 自然の眞子は幸ある哉。  
 今夜は子刻こく吾も寐ねで、  
 河邊の逍遙せうぎょう汝に似るか。

蟋蟀

蟋蟀在堂 役車其休  
 今我不樂 日月其愴 唐風  
 自然の眺めの美々しい哉  
 末葉にみだるゝ露に酔ひて

静けき夕のすさみとてや、  
この草がくれに虫は鳴けり。  
手纏の眞玉とさゆる音色  
軒端にこぼるゝ榎の實みても、  
眉根を開いて笑みぬべきを、  
何をか煩らふ君が姿  
鏡と見るまで澄める空に、  
輝をうつすも心なしや、  
若紫なる色にしみて、  
酌めども盡きざる酒もあるに、  
溢るゝ涙を袖にけして、  
來りて甘露の盃を含め。

夕

彼方にけむれる森のあたり、

孔房によりそふ稚兒の如く  
静かに眠れる空の色も、  
浅紫にしみゆく此夕暮  
願ふは艶なる君と二人  
野末の逍遙心足りて、  
情に燃ゆる胸の中に  
秘めたる小琴や弾いて見んか  
さらすは千種の花をともしに、  
さしそふ水枝にそよぎわたる、  
涼しき夕風髪にうけて、  
霞に眠れる野邊の如く、  
優なる姿に倒れ伏して、  
ねざめぬ夢にそ切に願へ。

眞珠



小島にかゝれる曉の月の、  
 溶け入る光にかぞへ見ても、  
 寢覺の海神龍の宮に、  
 得難き寶や誇りけんよ、  
 夕暮先づ射る一つ星の、  
 か細き光に透かし見ても、  
 沈みて果なき其命の、  
 痛みや泣きけん蚕の子らは、  
 あゝ幾千歳の春の濤に、  
 額をひたして學びわたる、  
 尊き教を胸に藏め、  
 静かに爛めく姿みれば、  
 美々しき才子の璠璣に似たる、  
 瞳子の光ぞ忍ばる、哉

桐葉

桐の葉飛びたり。諸手組んで、  
 澄みたる虚空を仰ぎ見れば、  
 浮雲悠悠々々答なきに、  
 桐の葉抱いて岩に座せり。  
 物皆屯所を無期におくか、  
 今葉はこぼれて土にいれど、  
 千載がはらす春を待ちて、  
 善い哉。生命を人に語る。  
 千曳の巖は背にも負はん、  
 神の戸射貫きし武者の如く、  
 誰身か恐るゝ心なしに、  
 落ち來る奪ひて木葉裂くか、  
 神其を作れり。誇る子らは、  
 來りて其身の力試せ。

尼が紅

一 若きは何ぞ耳朶の色さへ冷めて顔くは  
 吾興ざめて覺ゆるに  
 まづ盃をかたむけよ

二 木の實食ふも種とりて  
 土に埋めおく君なれば  
 ひくき調も耻とせず  
 顔さしあけて顔ふなり

三 そも女子を譬ふれば  
 鳴目くいる組紐か

あはれそくも吾戀の  
 き紅に燃ゆる哉

四 君深山路の木隠れに  
 朽つる精舎の壁を見て  
 枯れし命のおきどころ  
 悲しとおもふ事なかれ

五 われ墨染の袖をりて  
 火掲げし程こそは  
 火影にうつる本尊の  
 鏝たふとくも覺はけれ

六 春の夕ぐれ只ひとり  
 堂にたれたる曼陀羅に

習せし尊者の肩を見て、  
おもむきもなき身を泣きぬ。

七

請ふ言よせて今更に、  
緇素別なしと嘲けるな、  
光り見初めし始には、  
吾なほ戒を知らざりき。

八

夏轉寢に、羅衣の  
袂かけても秘めたるを、  
瘠せし頸にまかんには、  
あまりに惜しきかひな哉。

九

燕戸に入る永き日を、  
獨り寂しく入角の

太き柱に身をよせて、  
説くに耻ある物思。

十

深くな問ひぞ、例ある  
まれの夕座に若人の  
髪美しくしき姿みて、  
浮世ゆかしと戀ひそめき。

十一

誰行すりに香をかぎて、  
荆棘がもとを探らざる、  
誰田の畔に音をきいて、  
葉かけの雛をのぞかざる。

十二

儘よ、肌は業風の  
鏡き爪に裂けぬとも、

優しからずや力ある  
腕によりてさすらはり

十三

あゝ人知れず目なれてし  
御寺の庫裏を逃れいで  
野に咲く花に隠れたる  
胸の思を誰か知る

十四

これ引接か、幻の  
薄き望に導かれ

快樂の小壺此日より  
むすぶか儘と思ひてき

十五

暫し木蔭に、咲簀ときし  
實ある頃を忍びしも

乳房さはりて吾胸の  
力ある血に氣は立ちぬ

十六

塵の巷に智者しらず  
情ある子のなからずや  
遅日ぐらしさすらひて  
落ちたる珠をさぐらまし

十七

身は羽かるき胡蝶にて  
花の香とめて行き行けば  
此處に彼處に歡樂の  
夢盛りなる浮世かな

十八

黒染衣ぬぎすて、  
紫裾濃着更ふれば

みだれて高き袖の香に、  
人なつかしき思あり。

十九

頸にかゝるあまそぎの  
姿をかしと指さすな、  
一は手半振分の、  
昔とも見よ情あらば。

二十

股の和毛に蜜ぬりて、  
木ぐれにいそぐ蜂の子よ、  
君が衣の香をかいは、  
吾に告げこよ人しれず。

二十一

花の梢に乳をかけて、  
霞をつゝむ幔幕は、

誰が蕪樂のひしろかや、  
揚羽の蝶の紋所。

二十二

許せ沙尼が身戀ありと、  
幕引きかゝけ鏡へば、  
頸うちよせしめやかに、  
春たのしむか諸人の。

二十三

盃かみて手をくみて、  
日かげに背く若人の  
顔さしのぞく女子り、  
何を囁く忍び音に。

二十四

君唇に笑あれば、  
胸に戀路の苦もなけん。



吾他の例見る度に、  
むすぶの神に恨あり

二十五

花影たゆる川隈の  
岸の若草ふみゆけば、  
情あるかなよき人の  
春暮ひゆく屋形舟

二十六

琴の細緒に指おちて、  
唱歌の聲のおこる時、  
龍頭鶴首水を蹴て、  
權にりやらめく波の玉

二十七

鳴く鳥が音に苦あけて、  
しばし流人のみとれずや、

病める胸には餘情ある  
律呂を切に堪へがたき。

二十八

伽陀になれたる耳とちて、  
柳のかげによけければ、  
落つる涙はたぬれど、  
胸のなやみを猶しきる。

二十九

頬にふりかゝる黒髪を、  
とる透櫛にかきあけて、  
衣紋つくるひ見かへれば、  
髪のかゝりば香あり。

三十

見と、顔にはしる若鮎の  
透影しるき水底に、

巳が姿をしづめては、  
棹さし下る筏あり

三十一

筏役士何見て下る、

渡漕ぐ舟足早み、

まなかひ走る少女子の  
袖のみどりや見て下る、

三十二

聲ふりあげて若者の  
行方や知ると言とへば

姿いかにとかへされて、  
何と答へん恥かしや、

三十三

目か、黒髪のみりかゝる  
紅にきらめく美々しさり、

尾上を渡る明星の  
暗きを闌く姿あり

三十四

鼻か、程よく肉づきて、  
顔整ふる氣高さは、

森をふまへて日に向ふ  
城の櫓の風情あり

三十五

聲か、真紅の唇に、  
響きてさゆる清しさは、

花を砕いて狂叩く、  
伽陵頻伽の音色あり

三十六

地細の縞の浮かざらば、  
地細の縞の浮かざらば、

三十七

地細の縞の浮かざらば、  
地細の縞の浮かざらば、

寺の柱に喚ぐ如き、  
空薫物の香をとめよ、

三十七

名か思はずや逍遙に、  
一本咲ける花を見て、  
髪にかざして眺むるに、  
名を問ふ隙も客れトとは、

三十八

下る筏を呼びとめて、  
岸の芝生を追ひゆけば、  
裾はいばらにからまれて  
圓き踵は傷つきぬ、

三十九

あかき血汐の溢れては、  
野に花塗るに、色鳥の

長き愁を引くみせて、  
覓むる人を誘はゞや、

四十

貝多羅葉の末葉みて、  
經思ひでん人ならば、  
わたる血汐のあとをみて、  
人哀ともしのばんか、

四十一

あゝわれたへす眩きて、  
君がすがたに焦るゝを、  
何くるしんで、僻者の  
世にわづらふか、人の子よ、

四十二

會下うちむれて春の日を、  
はてぬ論議に消す如く、

趣味なき事に若き身の  
花にそむくはうからずや

四十三

水面錆びたる智慧の井に  
飲げし盃さしいれな

ぬるき車くるまのしたゝらば  
花の眞まこと袖そでの朽くちやせん

四十四

見ずや若草わかしら離り々々として

霞吐かすみはく野のの末すえとほく  
野馬のまうちひれて永ながき日ひを

あかぬ快樂らくに酔よぬらし

四十五

堅かたき蹄ひづらをふみわけて  
雄おとこか香風かきかぜにいさゝけば

二つの耳みみをふりたてよ  
雌メか鬣はげを波立なみだてぬ

四十六

腹帯はらひほどけて若草わかしらの

花はなに青毛あおげのさまよへば

肌背はだせに春はるをうちのせて

路みちなき野邊のべに采毛あざげ飛とぶ

四十七

あゝ姿すがたあり心こころある

野のべの陸むらにくらべては

唯ただ耻はづかしき人の世よや

此處こゝに榮はなし、慰籍なぐさなし

四十八

裾すそうちらはらひ過ぎゆけば  
里さとの細道ほそみち花はなちりて

胡蝶をどろく田の畔に、  
妹背手をととり歌うたふ、

四十九

道行くところ部落あり、  
部落ある地に屯あり、  
屯のなかに若きあり、  
若きがなかに戀歌あり、

五十

外不興なるこの世には、  
若き胸よりあふれいで、  
香を吐く息の響こそ、  
柱なき緒に鳴る曲と知れ、

五十一

君が姿のこひしさに、  
桃の蕾の紅とりて、

日かげうつろふ白壁に、  
まづ塗りそむる髪際や、

五十二

爽ふる指に鳴る豆の  
細き響は傳ふれど、  
それと幻に見る影の  
畫にあらはれぬ悲しさや、

五十三

消して畫きて消す程に、  
生命ある目のうつらねば  
心のみこそいらだちて、  
朱に染みたる手は倦めり、

五十四

壑道かよふ旅人の  
側目もふらで踏せくに、

ふりさけみれば紫の雲のあなたに日は落ちぬ

五十五

田畔づたひに渡りゆく

宵の霞に閉されて

眠りおぼゆる其中に

君もと知れば懐かしや

五十六

技さしかさす古柏の

静かに暮るゝ此宵を

雨も注げと祈るかな

五十七

花の香を蹴て歸る如

羽露色ある燕の

髪うちぬれて吾夫子の樹蔭頼まばいかならん

五十八

神此を許せ幸なくて

十歳浪路に浮きし子も

妻敵うちて寢室に入り

夜を睦語にふかさずや

五十九

若し今こゝに君を見て

若き思の物狂

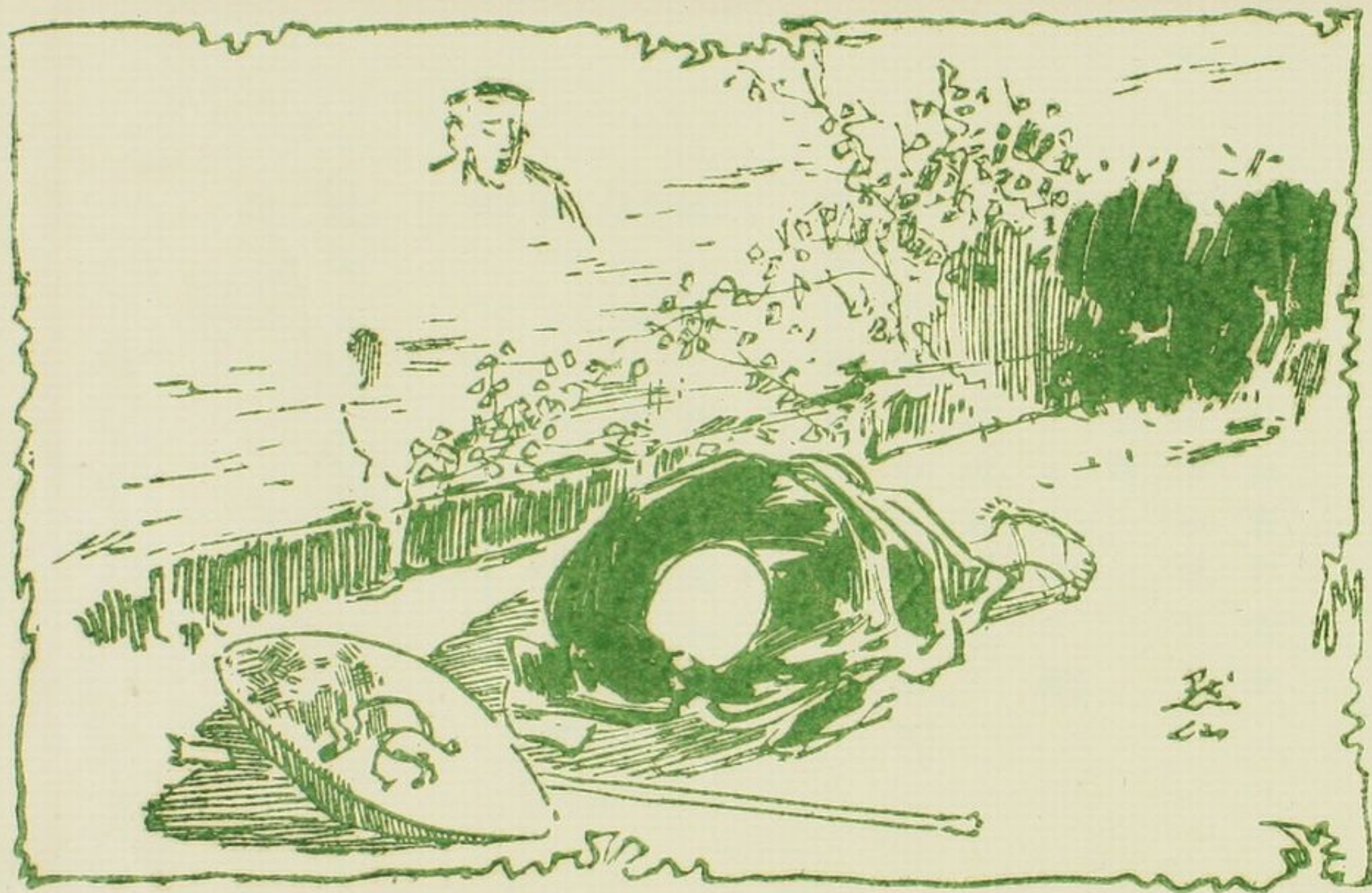
吾煩ひを忘れ得ば

猶幸多き子ならんを

六十

逸品得たる市人の

富の限りを放らすや



君が腕によらんとき、  
 吾わが命を擲たん。

六十一

賤の男がうつ連枷に、

丹穂はらゝと散る如く、

夜の社より糠星の

きらめき落つるをかしさや。

六十二

小櫛とりさす腕揚げに、

おつる葉露のきらめきて、

葉守の神のさゝやかか、

暗にか細き響あり。

六十三

今薄くとも燭おらば、

下技がくれにさし入れて、

若葉にこむる春の香を、  
心酔ふまで嗅がましを。

六十四

竈火うちまもる竈の神  
冷やし厨にぬる頃を、

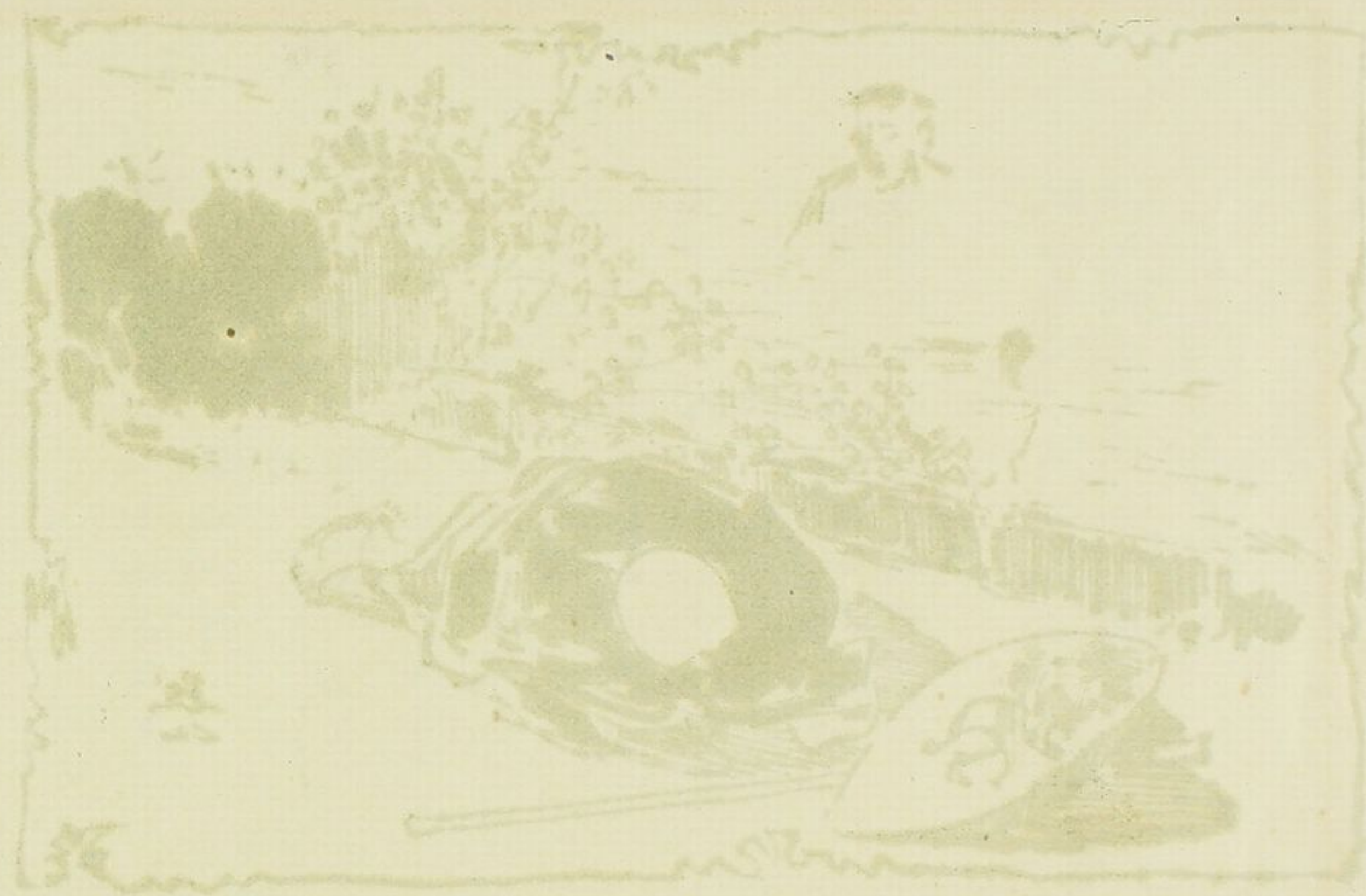
凝らす瞳子のきらゝかに、  
吾ひとりのみ物狂。

六十五

暗にかくれてほのかなる、  
人の姿を透しみて、  
諸手さしのべよりそへば、  
顔に下技の露ちりぬ。

六十六

睡にさはる花と葉の  
色香も知らず探り來て、





寫まつはる其かけに、  
手心圓き石を得ぬ。

六十七

是撥とみて手ずさびに、  
木の振叩いて聲細く、  
啼すとしもなき吾歌の  
をさなき節を誰かさく。

六十八

摩尼珠得たらば衣ときて、  
深くも包め、永き日の  
手慰みにと置きし間を、  
吾そのかけを失ひぬ。

六十九

世に若者の頸より、  
榮ある珠の名はなきを、

浅き少女のたなどこに、  
定まり兼ぬるうたてさよ。

七十

きみに教へん夕暮の  
道危きに宿とらば、  
米は黒くも美人の  
白きを撰べ旅人よ。

七十一

かの和肌に手をふれて、  
底の泉をさぐりみば、  
天濃漿か、枯木なる  
男の知らぬ趣味を見ん。

七十二

燃ゆる思の苦しさに、  
智覺なき木をかき抱き、

暫し吾世を泣く程に、  
冷れたる幹を暖めぬ

七十三

姿優なる春の夜の、  
響もたてゝ更けゆけば、  
鼻にぬしなき香をかぎて、  
人なつかしき思する。

七十四

うるむ眼のちからなく、  
空の容子を窺へば、  
光りまたしく糠星の  
眼をさそふ優しさや。

七十五

めぐる遊星小車の  
響もたてな思寢の

夢やさめんとかこつまに、  
夜や明けぬらし鳥ぞなく。

七十六

下枝をもれてさし照す、  
明き光にれどろきて、  
けむる臉をみひらけば、  
こは天變か世のさまの。

七十七

誰に比すべき玉手箱  
紐とく程の宵の間に、  
浅ましいかな袖さけて  
紫袂濃色ざめぬ。

七十八

草かきわけて葉がくれの  
水の溜りにうかへば、

若き命の星と聞く、  
瞳子の色ぞうるみたる。

七十九

松浦佐用姫領巾ふりて、  
石と化せしは趣味あれど、  
唯思寝の夢の間を、  
かゝる様とは疎ましや。

八十

身は木乃伊にて佇めば、  
野守の鏡ひいらきて、  
底に罔象の聲細く、  
人の歎きを笑ふゆり。

八十一

君漢才に富みたれば、  
吾に教へよ、鬢ぐきの

三十路をこねてあせにきと  
うらぶれ泣きし人の子を。

八十二

吾劣らめや、黒髪くろかみの  
櫛くしにもたへではるくと、  
こぼるゝ見れば、こは如何に、  
緑きりの色いろのあせにたる。

八十三

風流ふうりゅうれゆく隼鷹はやとの  
凝これる眼め子こと云はざるに、  
唯一ひと目め見みよ、春はるの日ひの  
景色けしきは早く移うつるひぬ。

八十四

野のにさまよひし佐保姫さほひめが、  
紅裳べにぎほの裾すその糸いとはつれ、

花は露なく地にたもて、  
枝にさよやく青葉あり。

八十五

春をひみて和らげし、

霞の帯引きよけて、

いかのしいかな夏の日の

空は晴れたり高らかに。

八十六

夏の日ざかり旅ゆけば、

泉のはとり野の木かげ、

憩へる人の多かるに、

人もとめよる便りあり。

八十七

君は流れの見渡しに、

一本咲ける百合の花

吾は河原の砂に飛ぶ、  
翼かよはき野の胡蝶。

八十八

儘よ水面にくるめくも、

吾れ金色の羽ふりて、

紅の香高き唇を、

君にふれでは止むべしや。

八十九

かの糸倉を引きしめて、

撥によき音を聞く如く、

思ひせまりて吾胸に、

戀の力を溢れ亂るゝ、

九十

問かきわけ妻をへは、

末葉の鬚に髪をよけ、

くさり行く水うちよせて  
紫裾濃襦ぬれぬ。

九十一

小櫛は落ちて見わかす  
道さかへり尋ぬるに  
痛み覺はて手を見れば  
指環は朱の血に染めり。

九十二

きみ指ざして高聲に  
降魔の相とな嘲けりぞ  
われこの底に熱情の  
手ならで觸れぬ物藏す。

九十三

青葉風ある木がくれに  
行く佐保姫が身ならねど、

人目を詫びて唯ひとり  
急ぐ心を誰か知る。

九十四

行手に高き岡越の  
杉の木立にはのみたて  
落つる光りを彩れる、  
嚴物造こは寺か。

九十五

それと見るより住みなれし  
庫裏の古壁目に見えて  
墮落せし身の罪なれや  
むかしゆかしく歩は遅く。

九十六

伽藍の軒に鳩飛びて  
影しづかなる境内や、

無聲をやぶる咳きに、  
碎けておつる木蓮花

九十七

鐘樓にのぼる出家一人  
歩みものうき日盛を、  
後姿さむく石階の  
下にぬかづく物思

九十八

顔ふりあげて來し方の  
幾山川をながむれば、  
おのづからなる其様や、  
此處に雲行き雲かへる

九十九

去來迢々若き身の  
長き恨に堪へやらず、

顔く膝を折りしきて、  
落つる涙をぬぐふかな

百

森を隔てゝ里の子の、  
影叩いて諸聲に、  
歌ふは何か情ありて  
世にも哀れの一ふしや

百一

『れ染十七逢合傘に、  
人目恥ぢしは昨日かや、  
今は法衣の袖儿帳  
目もと可愛き尼額』

百二

われ朽尼の身に堪へで  
趣味ある方に迷ひしが

快樂花さく下かけり、  
補ぬれがちの世なりけり、

百三

今物語に名をかりて、  
供物具すべく思へども、  
塵の縁をにぎりたる、  
五ツの指に恐れあり、

百四

消ゆる期もなき胸の火は、  
寺に匂うなき物なるに、  
せめて縁ある若者の  
手に擲たん名を許せ、

百五

撞く鐘の音に驚きて、  
袂のちりは拂へども、

名残はつさず遅々として、  
ひとり行方に迷ふかな。

遊子

"It is not love, it is not hate,  
Nor low ambition's honors lost,  
That bids me loathe my present state,  
And fly from all I prize! the most."

— Byron

ひと日松蔭に坐して、思に沈めると  
き奏曲高く過ぎゆく樂隊ありかへ  
りみれの幼時嬉笑を共にせり友な  
るにこそ何となく涙なかれて胸のな  
やみ堪へがたければよめる

風の荒みに耳たてよ、  
よべ手枕の夢やふれ、  
笛の調べに君を見て、  
けさ紅色の涙ふく。

雲と浮びて雨となり、  
浪とながれし身なればか、  
ぬれがちにする常なるに、  
怪しむなかれ旅人よ。

旅に寝旅に年ふるは、  
吾身ばかりと思ひしを、  
今日東路のよそにして、  
ゆかしや友を見にけりな。

君は肥えたり、笛ふいて  
天の眞名井やむすぶらん  
吾は瘡せたり、歌屑に  
からくれなるの血を染めて





無<sup>い</sup>み勝<sup>か</sup>なるまみ耳<sup>みみ</sup>か  
髪<sup>かみ</sup>のみどりもあせにた  
吾<sup>われ</sup>姿<sup>すがた</sup>にもくらふれば  
うべ若い哉<sup>や</sup>君<sup>きみ</sup>か身<sup>み</sup>は

いづれ長<sup>なが</sup>きと誇<sup>ほ</sup>りたる  
振<sup>ふ</sup>分<sup>ぶん</sup>髪<sup>かみ</sup>のこぼれてし  
それかあらぬか初<sup>はつ</sup>花<sup>はな</sup>の  
色<sup>いろ</sup>しのぼるゝ君<sup>きみ</sup>が額<sup>かぶ</sup>

誰<sup>たれ</sup>か真<sup>まこと</sup>心の紀<sup>き</sup>念<sup>ねん</sup>どや  
紅<sup>べに</sup>さし指<sup>ゆび</sup>の玉<sup>たま</sup>の環<sup>わ</sup>は  
懐<sup>なつか</sup>かしい哉<sup>や</sup>笛<sup>ふえ</sup>を囁<sup>ささ</sup>む  
なが唇<sup>くちびる</sup>のくれなゐり

露も色ある松か枝に、  
吹き残したる音をきけば、  
荊株をわたる鶺鴒の  
戀の歌にも似たる哉

細き瞳をひらめかし、  
笛吹きて行く若人よ、  
ゆめ苦き世の智慧の井に、  
汝が舌をな試みぞ。

晝は野山を吹きとよめ、  
暮は木暗に少女子の  
腕をとらん折にこそ、  
天の快樂はありと知れ。

律に馴れたる耳なれば、  
聴くな話さど世語は、  
告げて耻ある來し方の  
花も實もなき我身なり。

絶る腕もわなよきて、  
松が枝ごしに眺むれば、  
顔に亂るゝ紅涙の  
落ちて砂となりけり。

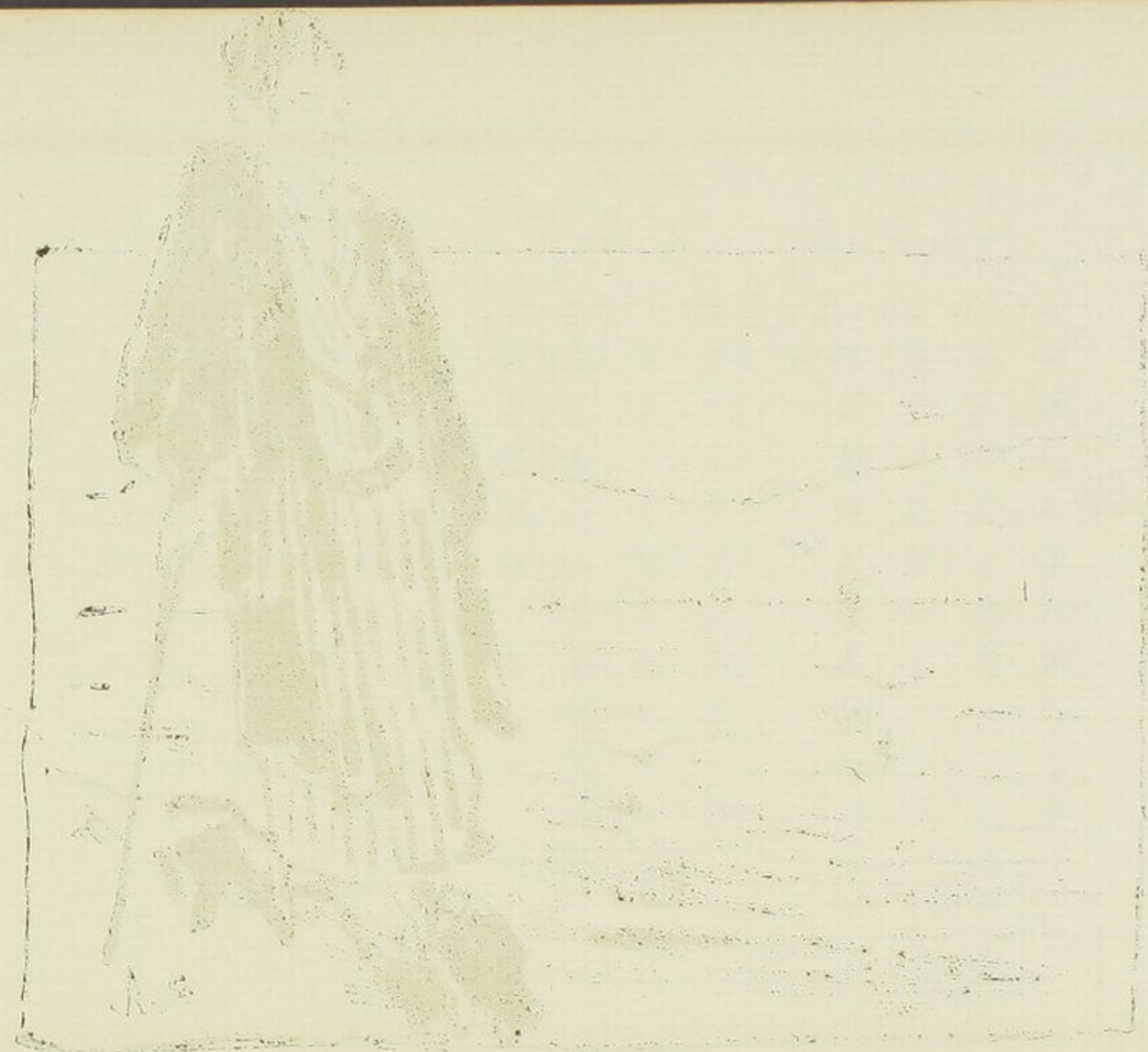
巖頭にたちて

思に堪へで磯の邊の  
巖が上になすめば、  
沈める海の底ふかく、  
かくれて湧くや春の濤



干潟にくぼむ鮫か子の  
 足占のあとにたへたる  
 なごりに映る影みれば  
 やつれにけりな吾類の  
 耳をすませば岩がくれ  
 湖き命の響きして  
 風にわななく蘆の葉の  
 波間に沈む一ふしよ  
 色めきそむる葦がひの  
 波に折らるゝ音をさけば  
 浮世の海に漂よへる  
 若き命のはかなしや

春の潮に洗はれて、  
 沈む真珠の色みれば、  
 浅ましい哉苦き世の  
 涙に酔へる日が身や、  
 目をめぐらせば海神の  
 沈める面に恐れあり。  
 手を拱ぬけば吾胸の  
 底に知られぬ歎きあり。  
 髪吹きみだる葦の葉の  
 風のぬるみに顛きて、  
 凍りはてたる額には、  
 熱き血汐もかれてけり。



ふるふ睫毛に溢れては、  
岩に砕くる紅涙の  
落ちて潮に聲あるは、  
底の珠とや沈むらん。

春夜

人無更少時須惜  
年不常春酒莫空 小野菫

春の光りの薄くして、  
若き快樂の短かきに、  
花咲く影に酔ひしれて、  
酒囀叩いて歌ふ哉。

花の香碎く風をあらみ  
細き眉毛を懸ませて、

燈火にかざす少女子の  
袖の心を知るや君

花を踏みては和らかき、  
踵にしめる紅色の  
名残の色をかへりみて、  
暮れゆく春を惜む哉。

脆き此世に又いつか、  
春を抱いて樂まん、  
せめて今宵は歡樂に、  
智慧の睡なめぐらせど。

盃を含みて目を閉ぢて、  
只さびしらの物思ひ、

君よ涙のせかれずば  
火影にそむけ人知れず

關山曲

君行く方に

里あるも

草鞋もとめな

旅人よ

脚絆の紐の

解けてこそ

宿かるべきに

似たりけれ

歌ふを聞けよ

覺束なげの予が  
一ふしを

酒は飲ひとも

盃の

ふちを合みて  
泣く勿れ

誰かは知らん

苦さ涙の  
あぢはひを

旅寝の夢の

君きみ  
紫むらさき  
の

やさし  
旅たびの身みの  
からすや  
今いま更さらに

人ひと  
の情なさけ

細こさ  
火ひ影かげに  
かへし見みよ

袖そで  
の綻ほころび

悲かなし  
味あじを、  
知しると云いへ

酔よめ醒さめの、

肌はだ  
うら  
寒さむさ

髪かみのほ  
嗅かぎてこ  
つれを  
一ひと筋すぢの

枕まくら  
に  
残のこる

古ふるき  
憂うれを  
捨すてよ  
か  
し

厚あつき  
情なさけ  
の  
睦なごみ  
語ことに

少おほ女なを  
抱かかり  
花はな影かげに  
寂さびしくば

旅	細	憂	君	眠	感
も	き	き	は	れ	は
情	山	は	急	と	で
の	夕路	獨	夕	何	旅
	迷	り	聞	處	人
	ひ	し	を	ま	よ
		の		で	
					長
					か
					る
					に

明	す	嬉	暗	妻	獨
日	が	し	路	覓	物
は	り	か	に	狂	憂
行	泣	か	目	か	夜
手	き	ゝ	凝	燭	半
の	も	る	ら	と	の
	せ	折	す	り	床
	ば	り	り	て	





宿らせ玉へ、なからずや、  
旅人よ。

草に眠れる旅客に與ふ

覺めな旅人、  
日ざかりは、  
越ゆるに熱き  
山路かな。

行方も問はず、  
名も問はず、  
只安らかに  
いねたまへ。

心 <small>こころ</small>	羽 <small>はね</small>	亂 <small>みだ</small>	紅 <small>べに</small>	憂 <small>うれ</small>	葉 <small>は</small>
し	な	れ	も	さ	影 <small>かげ</small>
て	障 <small>さまた</small>	て	や	も	の
や	鼻 <small>はな</small>	蝶 <small>ちょう</small>	唇 <small>くちびる</small>	彼 <small>か</small>	忍 <small>しの</small>
よ	面 <small>おもて</small>	の	に	の	花 <small>はな</small>
胡 <small>こ</small>	に	羽 <small>はね</small>	へ	寝 <small>ね</small>	ば
蝶 <small>てふ</small>		る	る	顔 <small>かほ</small>	れ
					て



悲しむなかれ少女子よ、  
 只さびしらの物思ひ、  
 垂こめてのみ暮しつゝ、  
 色めきそむる春の日を、  
 壁にそめたる  
 越ゆるに熟きかな、  
 覺めな旅人さかろは、  
 君と眠らん妻も、  
 花妻も、  
 ひしる腕に、  
 砕けても、

かの眞玉手に、  
 何れやさしの  
 草枕の  
 天つ少女の  
 額にまふ  
 花かづら  
 谷間の百合の  
 露くみて、  
 染めて見ましの  
 花笑や、

桃のうま酒くみあきて、  
覺東なげの木傳ひに、  
羽うちはふる雛鳥が、  
酔のすさみの音を聞けよ。

振りこぼれたる前髪の  
にほふ額に手をふれて、  
玉の指環にあたゝかき  
血汐の湧くを覺ゆすや。

水に散り浮く色みれば  
花のいのちの果なしや、  
老ての後のわづらひを、  
若さに泣くな、少女子よ。

襟にみせたる紅衣に、  
涙なかけぞ春の日の、  
薄き光りに照しては、  
幾日を待ちて乾くべき。

戀に燃わたる眼睛こそ、  
若きが程の花と云へ、  
咲き散る木々の色をみて、  
なに思はずや君か身は。

眉に閉ぢたる悲しみを、  
唇にくみて來たり見よ、  
桃のつぼみの紅とりて、  
壁に染めたる一ふしを。

ひさぶり

磯の葦がひ潮にぬるよ、  
われは君ゆるるぬるよ。

庭の鳩の兒小雨に瘠せぬ、  
われは君ゆるる顔やせぬ。

妹が襷は背にむすぶ、  
われは君ゆるる胸結ぶ。

腰が朝菜は夕につまる、  
われは君ゆるる身をつまる。

ふさうた

舟子よ漕げく、夕日の落つる  
岡に色あり光あり。

舟子よ漕げく、鴨浮く波に、  
刷毛一筆の黒繪あり。

舟子よ漕げく、濱風かよふ  
松に隠れて琴かゝる。

舟子よ漕げく、露おきむすぶ  
岡に色よき木の實あり。

舟子よ漕げく、飯巾振り待てる  
妹にやさしき情あり。

舟子よ漕げく、少女のすめる  
浦に榮あり、快樂あり。

蟹少女

君は浮べる沖の石

朝潮に、

ひたりて一層見ばぬする。

君は媚ゆる磯の芦、

朝風に、

吹かれてかすかに歌うたふ。

君はすすさきの一つ星

夕潮に、

寂しき姿を浮べつゝ、

君は芦間の蟹小舟

夕風に、

ゆらめく胸板ぬらしつゝ、

粉屋の女房

野こね、山こね、谷こねて、

京へと問へば猶三里、

粉屋の女房笑顔よく、

眉毛うちふり道を説く。

娘可笑しや

底の銹を洗ふとて、

河の浅瀬に水響碎き、

娘可笑しや顔赤らめぬ。

急ぐ旅人道とへば、

吃る口元袂にかくし、

娘可笑しや、顔赤らめぬ、

心化粧の束の間を、

さとき弟に指し笑はれて、

娘可笑しや、顔赤らめぬ、

蕪煮るとして鍋かけし

竈のぞけば薪は消えて、

娘可笑しや、顔赤らめぬ、

ね松釜たけ、菜をつめと

女房ふりをば母にも聞かれ、

娘可笑しや、顔赤らめぬ、

燕の賦

野の古巢をたちはなれ、

晋戸の柳の木傳ひに、

礎東なげの音にたてゝ、

羽試むる燕

一つ翻るゝ野の花に、

春の香高くしみ渡り、

水枝を染むる日の影の

花やかにさす朝ぼらけ、

翼しめりて立ちいづる

汝世はげにも幸ありな、

その紫の浅くとも、

やがて木の葉に身をのせて、

八重の潮路を越ぬべき

羽とし見れば方あり  
 歌ふ音色の若くとも  
 やがて霞める青柳に  
 かの新月を呼びいづる  
 それと思へば調べあり  
 小波ぬるむこもり沼の  
 水際の泥を啄ばみて  
 はにふが軒を柱礎に  
 興せる壁を塗る見れば  
 汝は才ある工匠哉  
 東風かるき城の春  
 花の彩雲穿ち来て  
 獨り興ある物狂  
 右にかけりて色を蹴り  
 左に飛びて香を碎き

こぼるゝ露に驚きて  
 花より花に迷ひ入り  
 風も仇めく夕暮の  
 鐘にうたれて飛びくれば  
 上羽にしめる移り香や  
 酔うて眠れる佐保姫が  
 鬢の油やこれならん  
 烟に似たる春雨の  
 一村こめてふりしかば  
 花の枝より湧き出る  
 桃の美酒雨みあきて  
 新發意が讀經聲細く  
 花散る寺の層塔に  
 光まばゆき夕なぎの  
 西の方をば夢みつゝ



噫あゝ鳥と名は呼べど、  
人にしられぬ一すぢを  
胸にひめすや、燕  
青葉がくれに仄見ゆる  
梧桐の花のくれなるに、  
片笑みて鳴く雀子の  
その木傳ひも何かせむ、  
情は深き女子の  
乳房を合む稚兒に似て、  
さはれば靡く青柳の  
糸にすがれるふりを見よ、  
東雲早く巢をたちて、  
雲の旗手を靡けつゝ、  
朝羽を振ふ蘆鶴の  
羽衣の曲も何かせん、

風に吹かるゝ柴の葉の  
尾上越ゆるも忍ばれて  
雲紅の夕ばねに、  
飄り行く姿哉  
圓き頸は葉隠れに、  
かゝる葡萄を見見る如く、  
胸の和毛の白妙は、  
女子の耻る肌に似て、  
瞳子の色のらうたさは、  
潮にすめる一ツ星  
上毛の艶の紫は、  
朱冠に彫れる雲母哉  
鳥よ羽振につかれなば、  
觸れてやさしき夕影に  
藤波なびく下がくれ、

若紫の酒くみて  
天の快楽を味へよ  
弾くや大絃小絃の  
風に亂れて鳴る如き  
酔ひのすさみの歌きかば  
誰かは憂を忘れ井の  
水鏡に似たる身をすてよ  
ふりさけ見れば紫の  
雲の行方を慕はざる  
あゝうら若き吾友よ  
ゆめ願泉のさかしらに  
光な避けぞ葉がくれに  
こもり沼に立つ青鷺の  
かひなき事を煩らふな  
朝日に舞へば光あり

夕日に鳴けば韻あり  
風に色あり野に香あり  
森に歌ある夏の日の  
あかぬ快楽を求めずや  
酒にそみたるかんばせは  
實ならずや若き身の  
歌にうるめる目の色は  
器ならずや若き身の  
飛べや梢の燕  
行方は夫と知らねども  
嫉しと思ふ汝が旅の  
袖ひきとめん吾身かは

百合花

巖のかげの小百合花



一夜のうちに蝶をうみ  
 嬌び姿の可愛うて、  
 ひねもす胸にいだきしが

夏の光のみせたさに、  
 放いて見うと手をとけば、  
 かはす諸羽のひらくと、  
 蝶は再びかへり来ず。

あら愛や惜しき事してと、  
 夜たゝ巖にもたれふし、  
 身のあやまちを悔ひ泣けど、  
 蝶は再びかへり来ず。

夜あけて見れば小狐の

はに無残や萎れたる  
百合、百合、あゝそこに  
打ひてかよふ蝶一つ

秋の歌

秋は樂しや、苦ふがき  
賤が軒端にかゝりたる  
柿の實染めて、味そへて  
廣き枯葉の袖ぐみ  
高架はしる葉がくれに  
ふくらむ葡萄房ふとく  
若紫の酒さして、  
胸あたゝかき少女子の  
朱の唇待顔に、  
葉分の風にゆるぐなり。

吾から振れて鳴る豆の  
 葉にさねたる音を聞きて、  
 枯葉がくれに見入るれば、  
 こはなつかしや蟋蟀の  
 欄り興ある物すさび。  
 行いて田面を眺むれば、  
 黄ばみて垂る、八束穂の  
 鬢梳らせて稲機に、  
 田子待つ間を秋姫の  
 風引きとめて靡きよる。  
 廣き額をかきなで、  
 秋の容子を窺へば、  
 霧の香高き東雲を、

爪紐の少女子が、  
 鬼灯ふくむ花の野や、  
 此處に優る姿あり。  
 こぼれて赤きさ、栗の  
 敷よみ誇る童子が、  
 歌うて歸る柴山や、  
 其處に静けき快樂あり。  
 燈火めぐりて沓なめて、  
 をとめ袖ふる星祭、  
 ろらぐ老爺の唇に、  
 泡さく酒の色を見て、  
 誰かは眉を開かざる。  
 散り透く森の下がくれ、  
 曉露に髪ぬれて、

窺ひよる獵人の  
含む小笛の音を聞きて  
われ昨夜の夢を忘る。

夕空高く峯にかへる  
豊旗雲を仰ぎ見て  
木の實もり食む山雀の  
律呂ある音を忍び聞き  
實のりて見ゆる鳥生に  
重き利鎌の跡ふみて  
露のみあける鈴蟲の  
節珍らしき歌さけば  
秋は樂しや吾胸に  
自然の興のをとるかな

木曾川

鮎子さばしる木曾川の  
沙路にひとりさすらひて  
白貝拾ふ少女が  
袖のみどりを見ずや君

頭々乎なる人の世の  
色なき香なき野を遠み  
春の日永のものすさび  
こは情ありをとめ子よ  
赤裳の裾のうらわかみ  
道も榮ある行さ來さ  
ひそかに渡る河風に

亂れて響く一ふしや

歌ふを聞けば春の日を  
小貝拾ひて集めみて  
いづれ夫はとる君はとる  
子安の貝を吾はとる

それは誠か若き身の  
潮のかほりにめぐりゆく  
潮の花の此春を  
君が胸にも茨きけりな

あゝ湧きかへる吾額を  
眞砂におちて窪みたる  
かの足跡に埋もらせて

深きなさを探らばや

琵琶湖畔にたちて

走る油鮪よみがくれに  
網代の網はくいととも  
ゆめ洩らさしな悲しみの  
細き釣緒にさはりては

透影しるき鱗を  
柳のかげにのぞき見て  
毒ある海にあはかなる  
身の薄命をれもふかな

木葉に似たる身を寄せて  
藻屑がくれにひるがへる

若きすすみも春の日の  
暮れぬる程のひまど知れ

水際に白き小波を、

湖の鯉にくだきては、

心ありげの物すさみ、

何をかくる、吾友よ。

星の光りに影みわた、

浦づたひ行く鯉が子の

足音に響く真砂路に、

小さき鱗をさしつけよ

氷雨に折れし葦の葉の  
春に遇ひたる心地して、

汝もつめたき砂摺に、  
あつき血汐や覺ゆらん

げに人の世は荒金の

ハをし溶かす釜なりや、

三のつやを見まくせば

の熱をあたゝめよ。

そこに沈める真珠あり、

こゝに香れる野花あり、

ゆくな油鮎よ、宵暗を

なに恥かしき契かは。

加古河をすぎて

横嶽にたなびきて、



光まばゆきこの夕  
波しづかなる加古河の  
濤に小網ひく蟹が子よ

浅瀬の波にはしりよる  
鮎子な追ひぞ、苦き世の  
味なき酒の盃を、  
吾水上に注ぎしに、

水面に落ちて光ある

廣き額の色みれば、

鋭き爪の凶神は、

見ざりけらしな蟹が子よ、

君妻ありや、すさびゆく

風に毒ある人の世に、  
胸やはらけき女子こそ、  
煙みの宿と知りたまへ。

君稚兒ありや、懐かしの  
乳房をふくむ唇に、  
いろも錆びたる智慧の井の  
にかき取なす、らせぞ。

小網にかゝれる白鮑の  
われもかひなく驚きて、  
唯恐れある物狂  
こゝに道なし、快樂なし。

行方も問ふな、名も問ふな、

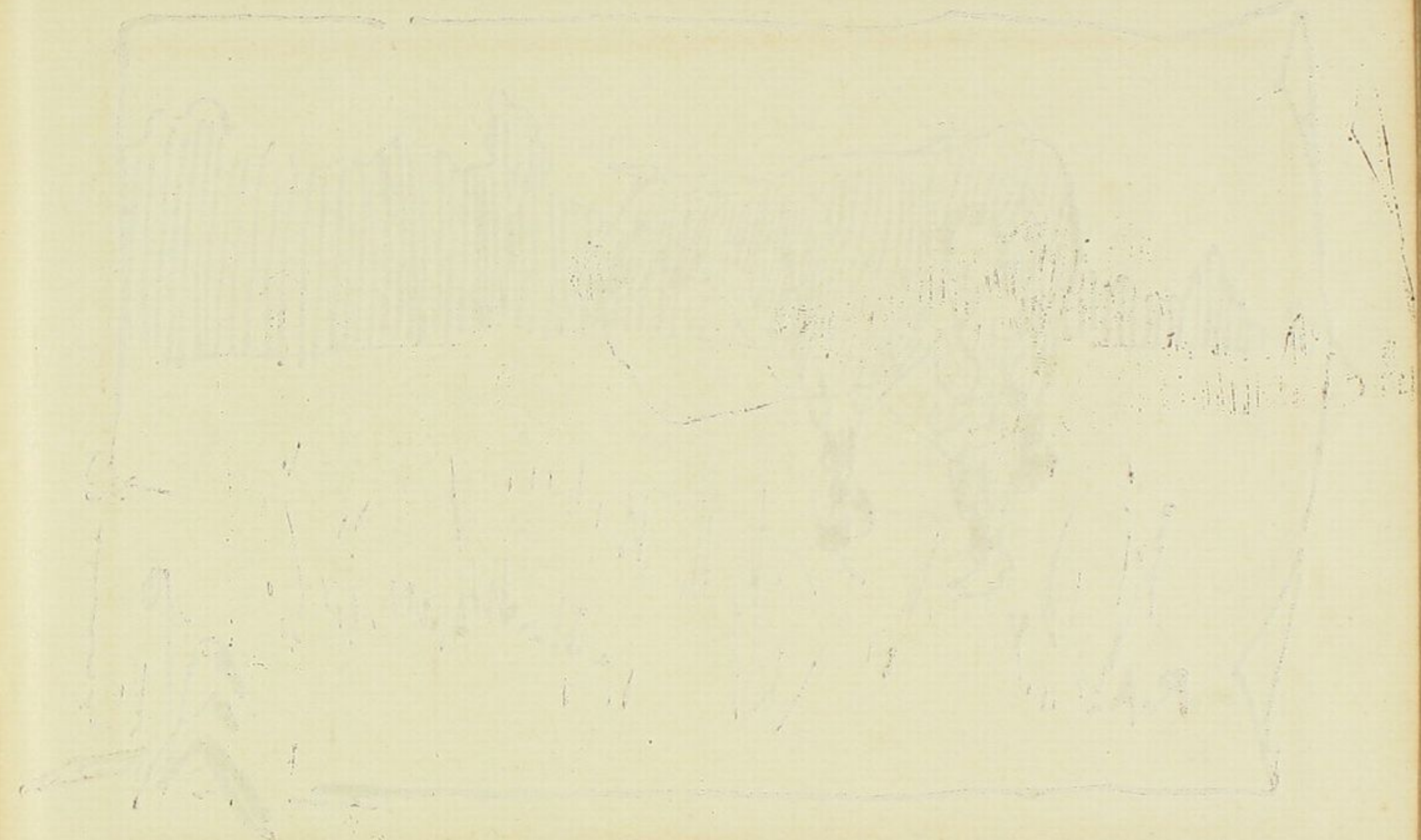


弛める弦の音にも似て、  
 風にわななく一ふしの  
 弱きしらべを聞けな、唯

梅保川にて

水色しるき梅保川の、  
 みぎはを染むる青草に、  
 牛飼ひなる、里の子を、  
 誰し哀れと見玉ふか。

堤七里に行きくれて、  
 脚絆解く間の夕闇を、  
 城のやぐらに花散りて、  
 老いにはるかな、この春も。



牛追ひかへる野の路に  
 踏むは紫つぼ草  
 踵すりよせ佇みて  
 なげく心を知るや君

人に別れて野にくたり  
 牛追ふ子らの名に入れど  
 春ゆく毎に靴裂いて  
 昔の夢を思ふかな

星はいでたり夜頃来て  
 慰めを見る其かげに  
 今宵は堪へず膝をりて  
 袂に顔をさしあてぬ

あ、和らかき眞砂地に、  
跡のあとをさほりみて、  
智覺なき身に人知れず、  
熱き涙をそ、ぐかな。

たのしみもなき人の世の  
寂しき境に泣かんより、  
われは情ある動物の  
野邊の睦びを望むなり、  
水色しるき裾保川の、  
みぎはを染むる青草に、  
牛追かへる里の子を、  
誰し哀れと見玉ふか。

華燭賦

止むなくば夫れ夏の日の  
若葉がくれに吹きれちる  
小石をあらふ細流の  
小波まくらにぬる風を、  
そよと許りに注がせて、  
燈火の花の香を高め、  
林神も眠る短夜を、  
獨り木暗に分け入りて、  
自然の致ある物狂ひ、  
心なぐさに遊ばまし。  
あ、紙魚くいる破反古の  
鏝びたる海の底ふかく、

探る秀才のまみに似て、  
細くきらめく色見れば、  
心の鏡すみわたり、  
うちには快樂の影たへ、  
唯人の世のたのもしく、  
木の暗闇に若草の  
香るが如く、新なる  
生命の味をさとり哉、  
巖影ふかく咲き残る  
花の萼を照し見て、  
高き香を鼻に嗅ぎ、  
破れたる袖をかざしても、  
なよび姿にはるまば、  
燈火上燃ゆる汝胸の

げに魂合へる友なるに、  
よしや火影は薄るとも、  
木の芽たきこめよき人の  
袖の移香しのばせよ。

これ手にとりて少女子の  
清き寝顔を守るべく、  
これ身にそへて歌反古の  
影ある珠を拾ふべく、  
脈にさはりて吾命の  
さかりの春を知る如く、  
暗路にむかひ天地の  
道ある方を透かしみて、  
頼もしいかな、白毫の  
幸ある影を認むべし。

暮笛集畢

批評

暮笛集 (薄田泣菫君を想慕して)

與謝野鉄幹

「暹日ちまたの塵にゆき  
力ある句にくるしみぬ」  
誰かわはれむ「詩に盡せて  
髪をつれたる人の子を」

「石をつつみて玉といふ」  
なほ輕薄の世をゆるせ  
玉をぬたみて石といふ  
げに我ぞちの堪ふべきや

さらば野川に鶴鶴の  
無心の歌をまなばんか  
「人は行きやう故もなく  
鳥を叱らで過さざる」

「あゝ、いくたびかわかき身の  
狂氣はこゝよ、何として  
癒せたる骨をささむことも  
「相愛なき身」と成らるべき

病める女鹿の腹を射て  
おのが矢の名を誇ることも  
名もなき草を踏みちらし  
誰かよわさをおぼれまん

うへ「闇につくみごかごと  
おなじり、驚り、おせものゝ  
「偲昔」はびこる今ごきに  
君がこの歌なからでや

暮るる水の夕月に  
笛の音とほくむせぶとき  
沈洲の江に世を泣きし  
楚の賢人をしのぶこと  
夢くれなるのため涙

顔ををしるきにが笑ひ  
君がえげきのおもかけを  
さながら見るよ君が歌

たくみつたなき禿筆に  
わが杜撰をくはへずも  
君が歌なる奇しき句に  
君が賛美をつくさばや

「斧にたふれし白檀の  
高き苔森に散ることく  
うすきぬ隙けば遠き世の  
ふかき福三身にせまる

むかへば花の羽衣の  
袖のかをりを鼻にかぎ  
叩けば玉のしろがねの  
冠冕を弾くびびきあり」

うらやむなれ市に立ち  
くちびる紅き友の上

百千の首をしらふとも  
聞くことあらし新かる音は

もどむるなかれ酒會に  
わかむらさきの春の泡  
百千の雲を倒すとも  
しづくもあらし新かる音は

「ふるさといふをかきいだし  
ながき懐ひを託しては  
舞ゆる蛇の行く方に  
露の羽を揮つ君ならし

花のをどめのはらからと  
すみれ摘み摘み歌ふとさ  
なにかは苦き世なりとも  
牛追ふ群をうらやまん

「千歳鏡の鏡はみきて  
冷えたる面にさほり見よ  
激しき胸をおさへては

あまりに泣ひその聲や

さは云へおなし寂寥を  
此處にもわふるわかき身の  
君が詩集をふどころに  
涙せきわへず打なげくかな

(國文學)

●「暮笛集」のために

大坂の書肆金尾文淵堂、頃日美装稀に見る處の新体詩集を發行す、「暮笛集」これなり。藏むる處の詩は、純て清田流董が「木のとしの暮より、亥のとしへかけての作なり」と云ふ。流董が親友不孤平尾氏、適かに書を大坂より寄せて、其友の爲めに、われに此の集の批評を乞ふや切なり。然れども、われ未だ現時所謂新体詩なるものに就きて、多く學ぶ處あらず、藤村、岡野雨氏の如き、その名は切に斯壇に謳歌せらるゝと雖も、未だ嘗て両氏が作だも、深く研究せしことあらざるが故に、今この「暮笛集」に就きて云々せんと欲するも、その言の必ずやノンセンスに近からんを、奈何かせんや。遂て思ふ、頃者、世間往々流董その人を誤解し、從て彼が詩に就きて、あらぬ批評を加ふるもの多し。われは流董を知ること不孤の如く深からず、而かも、彼が嘗て都に在りし時、われは彼と交を共にせしことあるの故を以て、聊か彼を知れるを信ず。よしさらば、こゝに彼が爲めに辭し、聊か世の誤解を正さんか。



わが知れる處の泣菫は、情の人なり、「感ずる」の入なり、餘り多く感ずるの入なり、その物に關れ事に感して感ずる處のもの、即ち化して彼が詩篇となる。われは彼が「病める泣菫」の文字を、屢々その書信の中に使用したるを記憶す。而かも之れ即ち感ひ感ず處なき彼が天真なるを、われは信す。何ぞなれば、餘りに多感なる彼は、その日々に接する事物に感傷することの餘りに甚しき、恐らくは、彼が心の平静を得る、極めて稀なるべければなり。あらず、彼が其の心に感傷せる萬葉の事物を、いかにせば「巧なく」有りたまふに、感ひ得べきかを研究せで止まんには、彼は唯かに、餘り熱情の人なればなり。此に於てか、彼は其の胸裡、常に「詩のなやみ」あり而かも彼は、明かに、之れを「暮笛集」の序頭第一に於て告白せり。

われはまた、泣菫が嘗てキイツを以て、その愛吟の第一者と爲し、反覆誦讀しつゝ、ありしを知る。彼果して、キイツに私淑する處ありや否や、未だ研究の途次に在りて、一道の光明を望まんと欲して得ず、内に蓬蓬の氣は有りながら「巧なく」「力ある」句をものせんと、轉輾反側しつゝある彼に向ひて之れを云はんは、事頗る輕忽なるべしと雖も、彼の詩想の幾分がキイツに感染せられつる處あるは、恐らくは疑なき處なるべし。

キイツが詩を評價する者の一人は曰く、彼は唯だ純粹單獨に感し、作せりと、われは此の言ひ、キイツが詩を評價し得て、頗る適切なるを思ふと共に、われは直ちに、此の言を移して以て、泣菫の詩を評價し得べきを信するものなり。かく云へばとて、われを以てキイツと泣菫とを相對比して云々するものと、連斷する勿れ。われは泣菫の詩を以て、キイツのそれと

相比せんには、泣菫の前途未だ甚だ遠望なるを知る。われは唯だ、泣菫が詩の「感」に於て之れを云ふのみ。少くも泣菫が作詩する動機と、キイツのそれと、「感」と同うせる点に於て、之れを云ふのみ。

要之に泣菫は未だ詩の研究の途次にあるもの、「暮笛集」は唯だ之れ、「詩」に獲せて、髮はつれたる人の子」の處女作のみ。彼が詩を大成するの日は、前途未だ遠望なるのみ、然れども、われは彼の詩が純粹單獨に感して作せらるゝの故を以て、その詩中一種不可言の「感」あるを認むると共に、彼が自ら告白する如く、未だ眞は「巧なく」「力ある」句を得るの境に到らざるに、その感傷せる處のものを、餘り有の儘に現はさんとするの結果、聲の上に現化せらるべく、未だ醒ならざる空想そのまゝの、彼がラインに上ることあるを憾とす。かるが故に、われは、この点に於て、泣菫に向ひて、爾後益々研究の歩を進むるを望むらんことを望み、世の「暮笛集」を讀まん人々に、先づ、泣菫が詩の「感」を味はらんことを切望すると共に、彼は、いかに詩の爲めに熱中し、而していかに「詩のなやみ」に轉輾反側しつゝあるかを、記憶せられんことを切望せざるを得ざるなり

(譯者新聞)

●泣菫著、暮笛集

桔 州

大坂なる久保田小塊氏。予に暮笛集一冊を寄せて評を求めらる。泣菫氏の新体詩集也。藝難粗淺。平弱無味。予は勉強して僅に其三分の一ばかりを評語し了らぬ。小塊氏は予が筆で敬服する所の歌人也。其小塊氏。此

の如き歌集を予に寄せたるは、蓋し是れを罵れどてなるべし。予にして若し泣菫氏の名を聞かざりせば、此の如き集を罵らんとせざりし者べし。只近來泣菫氏が新体詩に於て成功せる由の評判あり、特に後藤田外氏の如き口を極めて此人を稱揚せるが故に、予は兎も角も此に此集の事を云々するなり。「新小説」にて見たる此人の歌の中には、怪しき節も多かりながら、又おのづから眼を率く節も多かりしやう覺ゆるに此集の此の如く讀みづらきは何故ぞや。尤も此集は未の年より亥の年までの作なりとあり。されば泣菫氏去年までは此の如く拙劣にして今年頓に成功せるものか、予は未だ氏が今年の作と多く讀まず、されど氏が今新に此集を公にせるを見れば、其序文に於て「野調固より人に誇るに足らず」とはいへるもの、亦稍や自ら許す所あるは知るべき也。此集の如きを亦平線として論ぜば隨翠氏の如きは實に大々家たるべき也。嗚呼々々此の如き文字が盛裝せられて世に出づる間は、而して是等を持嗤して成功の何のと誇ぐ間は、新体詩界の事到底駄目也。試に此に哀笛集中惡調の例を記す。

誰に語らん和風(やわはだ)に。

指をさすれば此は愛しや

(村娘)

瞳(ひとみ)凝して見入るれば。

夢(うてま)にぬれる笑(する)の粉や

(暮春)

戀(あなうら)あらし運命に。

戀(あなうら)あらし運命に。

(暮春)

可憐(かれん)や軒に立ちくらし。  
凍えて泣きし談(はなし)あり。

(道端)

郎歌(ひなうた)ひとつ優にこそ。

さば郎女(みやこめ)の數寄こむる。

(太原女)

國女(くりやめ)さめて賢忠願

(海客)

風子(ねつみこ)道ふる親えたるは。

葉(か)さよう(得て)後を深らうと。

四更(よつ)まだ終ぬ詩人(うたびと)の

(五朝歌)

● 暮笛集を介す

後藤 宙外

薄田泣菫が數年來の新體詩を、一部の美裝せる書に輯めて、大阪の金尾文淵堂より發賣せるもの、是れ「暮笛集」となす。泣菫が作は遂に藤村陸翠の二氏と對壘して、決して下らざるの技倆あるは、此の集を讀む者の必ず首肯する所あらん。從來慣用せられたる、七五又は五七の調以外、更に八六の調を逐みて、一種の雄勁にして沈著なる格を用ひたるは、我が新詩壇に一大貢獻をなせるものと云はざるべからず。「紅袖」下、

長髪風ある放れ駒の、

杜馬の遠目に狂ふ如く、

驅の熱情一つによりて、

春の日ひねもす君を思ふ。  
そと一例とすべし。又「夕」を題するものを讀め。

十

彼方にけむれる森のあたり、  
乳房によりそふ稚兒の如く、  
靜かに眠れる空の色も、  
繪紫にしみゆく此夕暮。

願ふは艶なる君と二人  
野末の道迷心送うて、

情に燃ゆる胸の中に、  
移めたる小夢や弾いて見んか。

さらすば千種の花をともし、  
さしそふ水枝にせよさわたる、

涼しき夕風髪にうけて、  
露に眠れる野邊の如く、

優なる姿に倒れ伏して、  
ねざりぬ夢こそ切に願へ。

此等は決して此の集中の傑れたるものとして抽出せるにあらす、單に泣  
葉か調の奈何たるものなるかを示すのみ。十五調に於ても、頗る見るべ  
きものあり「遊子」の如き一例とすべし。

風の荒みに耳たて、  
よべ手枕の夢やふれ、

笛の調へに君を見て、  
げさ紅色の涙ふく。

旅に寝、旅に年ふるに、  
我身ばかりと思ひしを、

今日東路のよそにして、  
ゆかしや友を見にけりな。

君は還りたり、笛ふいて、  
天の眞名井やむすぶらん、

吾は瘠せたり、歌聲は  
いらくれなるの血を染めて。

の如き誦するに足る。此の他「ひたふり」あり、「ふたうた」あり、各體自  
ら別種の趣味あり。一格に拘泥せざる所、後來進歩の道は此の邊より開  
かるゝに到らんかと思ふ。集中の長篇「尼が紅」「兄と妹」「燕の歌」等類  
苦心の作と見ゆれど、卒讀して速評するに、却て當を得ざるの虞れわれ  
ば、更に熟讀意味の上、他日詳評を試むべし、幾暮百事繁忙を極むるの  
際、靜に味ふの暇なきを憾む。今は單に紹介に止め置くべし。その思想  
を吟味し、其の詩形格調を論じ、其の措辭詞藻を品評するが如きは、之  
れを來春に譲らざるを得ず。終に言ふべきことあり、吾人が曾て泣葉を  
讀詩社會に紹介するや、往々好む所に依するが如くに解し、吾人を以て  
偏見に陥れりとすすなきにあらす、然れども眞には「帝國文學」記者が  
彼れを以て先進の蟲を摩するに足るの天才也と評せるあり、今は「大帝

十一



透き入る異王の宮に眠る  
不滅のいのちを知る君は  
都に富める子孫羅をさても  
橋身に受あるおもひなしと

(琥珀)

遠島かくれに走る舟の  
波間にうする、帆帆と見えて

黄色に染みたる放れ雲の  
秋の日風をき空をわたる

(琥珀)

鏡と見るまで澄める空に  
聲をうつすもゆなしや

若葉なる色にしみて

酌めども酔さざる酒もふるに  
溢る、涙を袖にけして

来りて甘露の舌を含め

(螺 蚌)

以上挙げたるもの、外に於ても、叙景の上に或は落想の上に、余韻をし  
て收服せしめたる佳句極めて多かれど、調に於て首領けらるゝ節多かる  
を悲しむ。必要ならぬ限りは、擬ひ字句の連貫不十分なるの嫌ひはありと  
も、助辭を省略するは、詩作の上に詩才處にして、爲めに句勢を強ちら  
しめ、吟誦に快感を増加することあり。詩の如何なる種類を問はず、皆

然るべしと言ふの事を考へざれば、絶句十九篇に於ける、毫も詩節を備  
くるなくして、助辭を省略し得らるゝが如し。然らば、こゝに用ゐたる  
八六の詩形は、多くは唯助辭を附加せるものにして、七五と大差なきな  
り。余韻は八六詩形の如何を問はず、絶句十九篇に於ては、其必要を見  
ざるなり。余韻は泣重に望を囁する多ければ、自ら渠か短處と認むる二  
三の例を直言するを憚からざらしめたり。

余韻をして、津々たる詩趣を味はしめ、吟誦措かざらしめたるもの、三  
四篇に止まらず、曰く村歌、曰く枕詞の歌、曰く尼が籠、曰く遊子、曰  
く戦頭に立ち、曰く壁にぞめたる、曰く蕪の原、曰く百合花、措辭  
の熱せざるありども、渠が理想の筆の香に酔ひ、恍惚として吾我を忘れ  
つ、情熱し成極りては、狭き胸臆も閉ち塞がりて、恰と泣かむとすなり。

春ゆくはうべ白藤の  
花散る陸に身をよせて  
泣くは行末さだめなき  
世のならはしを感ふもの

知らずや薄き花びらは  
春の日を極くかをりあり  
月やわかばそき聲空に  
かなへちあくる力あか



桃のつぼみの紅どりて  
壁に染めたる一ふしを

結句何等の妙句ぞ。  
燕の賦に於て又吟すべき句少からず。

胸の和毛の白妙は

女子の耻づる肌に似て

種子の色のらうたさは

書にすめる一ツ星

上毛の紫は

失意に彫れる雲母かな

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

儂なれど、全篇の痛く散文的なるは、詩の性質の然らしむる處と、深く  
告めずといへばも憾して措辭生硬にして、文意朦朧なる節あるは遺憾  
なり。されど讀者の同情を惹く力は確かに認むるを得るなり。

深くな問ひぞ例ある

あれの夕座に若人の

髪うつくしすがた見て

浮世ゆかしと思ひぞめさ

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

此尼が塵落の發端にして、若き血の湧きかへりつゝ、そゝる心地に彷徨  
ひ出づるをわけり。

二十  
繁花風は亂る、薄暮に、飄遠す乙女が紅の裙、無心の舞を、尼は何と  
か感じけむ、流ればほるき川而下す俊士呼び止めて、聞かましや若者の  
名を。

下る笑を呼び止めて

岸の芝生を追ひゆけば

裾はいばらにからまれて

圓き瞳はきつつきぬ

水面錆びたる智慧の井に

鉄けし蓋さし入れぬ

ぬるき掌のしたいらば

花の眞補の朽ちやせむ

あはれゆかしき筆づかひなるかな、景情並び活けるを求むれば、

うるむ眼の力なく

空の雲子を窺へば

ひかりまたく、離星の

眼ぐぞとふやましきや

めぐる遊星小車の  
響もたてな思慕の  
夢やさめむとかこつまに  
夜や明けぬらし鳥ぞなく

身は木乃伊にて佇めば

野守の鏡ひゞらさて

底に阿呆の聲細く

人の對きを笑ふあり

何等凄惨の文字ぞ、又其終りに於て

消ゆる期もなき胸の火は

寺にわうなき物なるに

せめて絲あるわかものゝ

手に擲たむ名を許せ

撞く鐘の音に驚きて

秋のちろを拂へども

名残りはずさす運々として

ひとり行方に迷ふかな

の如き綿々として、雲とささるの恨あるかな、



要するに泣き、情あり血あり涙あるの詩人を、落想詩人に歸しては  
去た晩葉集に及ぶべくものあらねど、尚幼穉なる詩壇に於て、斯  
道のためには盡く熱誠の如く、而も其の如き多量の詩人あるを見て  
斯道前途に甚だ望を屬するに足る。尚修養を怠らず以て他日の大成を期せ  
むことを敢て一言す。

●熱情の詩人

(泣菫氏の暮笛集を讀む)

湖山閣主人

○新体詩といふものは分らぬものである。彼様いふ難かしい事を言は  
なければ、新体詩人となれぬのであらうか。とは、自分の知つて居る友  
達の一人が言つた言葉であります。

○詩其のものが、了解されぬやうに書き居るのでは無い。了解され  
ぬのは、讀むもの、新詩想が發達して居るからである。今のやうに、隨  
落した、趣味の下のな社會へ、如何に高妙な筆句を示したとて、何の價  
値も無いものとされてしまふのである。とは、是れも矢張り、自分の知  
つて居る友達の一人が言つた言葉でした。

○自分は、此の二人に、源田泣菫氏の作られた暮笛集を示した。そして  
二人の言ふ處を聞いて見た。が、矢張り二人とも、以前の言葉を持つて  
此の暮笛集を評し去つたのです。

○詩非乎、新詩者是乎。自分は、兩方の説に對して、甲の説にも賛成す

る。また、乙の説にも賛成する。そして何れにも加へない。是れが  
新体詩に向つての自分の考へであつた。此の考へは、矢張り暮笛集にも  
當てはめられるのであります。

○暮笛集は、羊の暮から亥の年へかけて、泣菫氏の作詩を集めた  
もので、其の中には、長篇短篇取りまぜて、廿二題の詩があつた。最も  
長いものは、「尼が紅」といふので、一節を四句として、百五節を以つて  
終つて居る。最も短いものは、「粉屋の女房」といふので、是れは全篇只  
だ四句の一節である。そして、絶句十九篇といふ題の下には、山雀以下  
十九の短い詩が收めてあつた。それから、此の内を、自然界の景物を  
題としたものは、鶴鶴、冬の歌、虎が雨、暮春の賦、鶴鶴の歌、山雀、疾  
雨、雲、蝶蝶、星、螢、草珠、桐葉、春の夜、燕の賦、百合花、秋の賦  
などを、人事のものは、村娘、兄と妹、大原女、羅祭、髪の手、紅涙、  
玉腕、紅絹袖、尼が紅、遊子、旅客に與ふ、ムをうた、童少女、粉屋の  
女房、楓をかしや等で、其の外に古鏡賦、華燭賦、孟賦、木曾川にて、琵琶  
湖にて、加古川にて、梅保河にてといふやうなものもありました。併  
し、何れも主観的の詩で、それに據つて、自分の情を叙したものでした。  
○自分が最も佳い詩だと思ふのは、「兄と妹」や、「句々」活人の心を透か  
し、「骨をえぐり」或は泣き或は憂ひ、或は嘆み或は慰めるさま、何にた  
どへやうも無い程であります。

○學びさして見かへれば、

○火影にぞむき泣泣くに、

「何悲しき」とよりこゝは、  
「感極る」と忍び音に。

兄ぞれ何故に泣く乎。

否よ之にして遊ばんは、  
家に勞るゝ身に吾かず、  
而ある旅に行かんより、  
つらくも吾はかへらんか。

又いふ、

世に無何有なく、絶れてなく、  
修羅承切につゝかんを、  
せめては兄と唯ふたり、  
生れし家に止まらん。

此の妹が慰あり。併しながら、兄は尙ほ叫ぶのである。

残んの城と立ちてもり、  
城をたのみ園樂をも、  
おなや無惨の大浪に、  
まかれて行かん人は此處。

此にまかれて悲鳴する、  
弱き雀に例えらさや、  
あゝ石どりて、誰かよく、

かの鎌首をくだかなか。

見よ、この蛇の行くところ、  
濁しき臭氣に氣は汚れ、  
香き、美しくしき、正しきは、  
背さしむけ逃れ去る。

唯闇につく寒草、  
姿も、許り、小賢こそ、  
御り、騒々、眞而非者の、  
露香を彼が跡をひよ。

汚れし毒は血に入つて、  
世はさながらの地獄なるを、  
籠り身ひとり影もなく、  
涙の谷にゆかんより、

むしろ驚ども身を化して、  
腐れはてたる人の子の、  
藤梨いて、懐ある、  
丁匠の手を、唯ひん。

是れ豈に炎々たる情火天に沖するものではなからうか。見給へ！句は躍り、筆は熱を以つ滿されて居る。是れ無いか是れを以つて、自分は篇中の白眉とするのである。

「尼が紅」は、餘程苦心の作とは見えなかつたが、餘りに散漫になつて、自分は感服できなかつた。それから「百合花」「冬の歌」「草に眠れる旅客に興ふ」「巫賦」「朝山曲」「村娘」などを殊に秀で、「遊子」「驛頭に立ちて」は悲痛な泣き聲を思ふて泣かざるものがある。憤憤の氣を以つて泣くものは「鴉鵲」に連して而かも調うらゝかざるものは「樞保川にて」で、軽いのは「娘おかしや」。爽やかなるは「舟うた」でありしやう。

泣菫氏の詩想

概して、泣菫氏の詩は、たゞ「秋の歌」のやうな、稍々光明的な精神を趣を存したものがあつたとは言へ、詩想は何れも厭世的である。現世の汚濁を嘆き嗚咽を憤り、其の憤懣と悲嘆の熱涙をば、力めて自然とて女に據つて乾かし慰めやうとして居る。が、それにさへも、慰める事かできなくつて、動もすれば、彼の熱涙が出て来るのである。

一言にして是れを評すると、自分は其の詩意を、日露の花といひたい。教育が悪いといふ點からでも無い、自分は夫れが常に憂鬱を感んで、幽靜だといふ點を言ふのである。笑つてたといつても、それは苦笑で無いか、憤つたといつても、それは小聲で無いか。併し、只だ萎れて居るといふのみで無さ、面目は常に一種の氣を、帯びて居るのでした。

到底今の泣菫氏は、慰籍して勵ますといふ向の詩人では無い。教導の

詩人でも無い。同情の詩人である。只だ夫れ同情の詩人、共に泣くべき詩人であつた。處で、泣菫氏は何故に泣く乎。何故に「唯唯かしき人の世や、此處に榮なし、慰籍なし」と叫び「たのしみも無き人の世の、しき境に泣かんやう、われは情ある歌聲の、野邊の睡みを望むなり」と呼ぶに至つた乎。それは分らぬ。それからまた、泣菫氏は、神を信じて居るのか、信じて居ないのか。人間が近海を去ること、何うしてもでき無いと云ふのか。また出来ても現今の人間はし無きから、それで可げ無いと云ふのか、其處のどこるか、自分は分り兼ねる。是れは、泣菫氏の理想の上に、大きな要素となるものだから、念の爲めに附いて置きたいのです。

其の内容

いでや、更に泣菫氏の想と伎倆を、細に分けて論じて見やう。それは先づ長所と短所と分けて言ひましよう。

自分の見た處、泣菫氏の第一の長所は、其火の如き熱情である。此の熱情は、至る所に透つて、金石の音をなした、あるのであつた。あゝ、此の熱情、自分は斯う思つた。たゞ、泣菫氏が、作詩の上に於いて、他の長所を持たなくつても、其の詩は、皆讀むに堪へたであらう。立派に詩人の資格を存したのでありましよう。(二)は其純潔である。實に清らかなもので、一點の汚れ無く、而かも、斬新な觀察と筆致を以つて居た。す。(三)は其深味である。句に鍛練がつんで居るだけに、思想が充分練れて居るために、片言隻句も皆深い味を持つて居る。(四)は其幽妙で、

かすかたる處、温物しき處、やさしき處、迷開始ん人をして、泣かしめる。尚ほ外に、毒點は深由あるだらうが、自分の見た處では、先づ斯うではありません。

其の短所をいへば(一)は常に消極的なものである。不平があつても、上へ出さないので、下の方を向いて居る。憤懣も、外へ申さないので、内へ閉じて居る。これは、其の性格にも依ることである。消極的詩想でも、美として充分價值を有する事だから、短所或は長所をいへるかも知れ無いが、自分は言はぬ。兵の如き詩才を持つながら、空しく消極的ののみ心を苦しめるのは、甚だ惜しいと思ふ。慰めを待つといふよりは、心中の苦痛を無くしてしまふと言ふやうには可か無いか。汚濁に足を染めるに忍びずといつて是れを避けるより、奮つて、此の汚濁を清めやうとする事にはできぬであらうか。自分は楽天主義を取つて生活して居る人間だから、さう言ふ言ひむと云ふ度強いのです。而かも此の消極的に傾いて居る詩。思想は、是れまで盛に發揮されて居るのであるから、無詩人の進むべき側は、寧ろ非消極的といふ側であらうと思はれるので……。(二)は壯烈の點が無いので、あまりに女性的な處である。消極的に傾いて居るといふのは、さらば一非を讀るとしても、悲壯の美に欠けて居る軟弱だ、去々しいといふ非難は免れ得ない、日本人の本性は、斯う心弱いのであらうか。自分は疑はざるを得無い。悲むならば、盛に悲め、憤るならば大に憤れ、あゝ是、自分が欲し願ふところの日本新詩人です。(三)は前にも言つたやうに、常に毒點である。其の詩は、關を以つ

て蔽はれて居るやうに思はれる。快活とまでは非くとも、想の動き方がです。今少し爽かには可なりぬものでせうか。是れが、自分の見た處なを短所でした。

詩の形式

併し、今言つたのは、内容の側であつて、更に言ふべきは、詩の形式である。是れにも、自分は感じたことがあるです。

兵は調子といふ事は、少なからず苦しい事であらうと思ふ、調の長合は誠に良い。そして、一句として、なかなか句勢が強く開ける。それから、たとへば

あ、田に飛んで  
餌はあける  
二羽の雀は  
一袋

の如き、又、  
橋夫至兵衛、朝明を  
山に駆けたる噂あり。

の如き、一種奇警な句を有する事である。更に藤村氏、西条氏おたりにも、其の詩集を見ると、随分同じやうな句が處々に出て来るが、幕當集には、紫世の酒といふこと、物狂びといふ事との外、あまりに發見しなかつたのは、文字の豊富の程見えて、よるこはしいが第ではありません。且つ七五の調以外にも、彼の「絶句」には、八六の調を用ひ、「張少女」には

七五七七五で一節をなしたなどを使つて、何れも成功した事である。彼の長い詩などには、悲壯な處、婉曲な處、快活な處など、只だ初めから終りまで、七五で續けなければならぬといふ風にやらす、偏所、調を變へて行くやうにしたらば、何れだけ詩を真くするからぬと思ふです。

形式に於ける短所となると、韻律を欠くといふ點である。無理は無いと思はれるが、あまりに其の弊が甚しいやうに思はれるは、雅言と漢語の調和です。漢語の方はまだ可いとするも、其の雅言が甚だ感服しかねる。雅言も可いが何故彼のやうな、古い縁の遠い、雑しい雅言を使つたのであらう。多くの人に讀はし、其の快感を起さしめる點に於いて、頗る不得策であらうと思ふ。それから一種の輕調も悪くは無いけれども、要するに其の用ひやうでこの用ひやうを能く注意して貰ひたいのです。

嗚呼熱情の詩人

暮笛集を讀んで、泣菫氏の詩について考へた事は、斯くの如くである。兎に角、渾沌たる新体詩界、只だ晩翠、藤村の外に、見るべき詩人といつては無かつた今日、此の詩人を併此の詩界を得たといふ事は、甚だ喜ばしい次第である。晩翠は壯麗雄麗といふ詩趣はある、が胸中は智が増さつて居て、熱情に乏しいやうに思はれる。藤村は、優美、溫藉といふ詩趣は、充分發揮するに足るが、彼の驚の歌などを見ても、氣が乏しい。此調に在つて、詩界に旗幟をあげるとしては、氏の熱情最も真とする處である。

わ、熱情、泣菫氏が取るべきものは、此の旗であつたのです。わ、熱情、吾れ人が泣菫氏に望む處は、是れであつたのです。

終に望んで、斯かる冊子の販賣といふ間に行つては、夥だしく損失の多い大阪の地で、何物をも惜まず、趣味ある挿畫を海山入れ、紙質の真好なものを用ひ、文藝の爲めに大に費す處をた、金尾文淵堂主人の志を多とするのであります。斯ういふ意志の實現を待たなければ、到底文學の普及は敏活に行きませぬ。

(櫻洲青年)

暮笛集

青柳有美

(泣菫は樂耳を欠く詩人なり)

泣菫は詩人なり、熱情ある詩人なり。恐らくは、詩美神を拜崇して遂に物狂はしくなるまでの詩人なるべし。之を比すれば、なほ中西梅花に似たらんか。その輪廓として苦心せるの跡、明に文字の上にあり、思想の如き文頗る富麗にして單調に陥れるの弊見ゆす、しかも晩翠の如く生意氣なる汚臭なきところ、殊に頗る敬すべく又愛すべし。されど聞く、思想豊かに、情迫り、考ふるところ潮の如く突き出で来る人は、數々口でこれに從つて動かす、遂に吃をなすことあるものなり。泣菫の詩の如きは、此くの如くは、これ詩の吃れるもの乎。一讀するに、「暮笛集」の作意は、調に拘る人の如し。其の取りて以て我が雅樂とせらるる「泣菫」の成語、既に頗る調音の典雅なるを欠き、人口に嗜炙し難し。著作に命名せる「暮笛集」の如き、更に一層の不調子なる語なり。この欠點遂

は全篇を通じて至る所に現はれ、厭る誦し難く味は難きものとされり。これ枯川をして忍酷なる冷罵を蒙らしめし所因にして、我が目して「詩の吃れるものあり」と女子所因され。されど、我れは枯川の如く、この必死懸命の青年詩人を一向のうちに冷待し去るに忍びず。察するに、薄田君は其隠微の訓練發達未だ充分ならずして、樂耳を欠く人なるべし。故に君の爲めに切に當ふところは、君か耳に音楽的訓練を加へて、その隠微の樂的發達を計られんことなり。又、暮笛集を一讀するに、未だ人情の痛切なる所に隠れ、天地の恐ろしく惜きまでの實相に觀せられたる跡なく、その歌ふところ、常に普通人情と普通智識との範圍を出でず、痛恨憤悶との、暗鬱として蟻り聞くことなし。是れ作者の未だ「おぼっちゃんやん」にして、人生の臨き開歷に乏しき故ならんか。されば、その戀愛を歌へるもの、如き、同情豊かならず、到底人の血を湧かさしむるに足らざるも、却て戀想を愛など罪なきものを歌へるには、讀者皆を感じ入るべし。凡て人くさいらざる程上出來に近く、殊に無邪氣なるところは其長所なるとに似たり。故に、泣菫の詩も、人をして感激せしめんは仲々に難く、晩翠を稱して生意氣詩人といはゞ泣菫を稱して「おぼっちゃんやん詩人」といふ、又可ならんか。されば、薄田君にして若し少年詩（ヂュネナイル、ポエム）などいふものは心掛けられせば、必ずや成功あらん。我れは全集中恐らく最も短けれども、最も秀でたるものとして「粉屋の女房」なる一篇を茲に抜くべし。

野こい、山こえ、谷こえて、

京へと問へば橋は三里

の隣の女房笑顔よく

肩もちうちう道を説く。

(暮笛集 第百廿五頁)

我れは、此の如きを以て泣菫の最長所なりと斷言す。次に全集中の白眉なりと思ひしは、第六十四頁なる八六調の「誰」なり。想も形も詞も能く揃ひて、青年詩人が限らなき苦心の胸中を吐のめりすもの、如く、哀れに又床しき心地す。赤松黙曲とぞいふ人の挿畫は、表紙の水彩と口給のコロタイプとは、一向感服し難けれど、粗筆の凡て爲山風の趣味と詩趣とを備へ、筆力又雄健にして仲々に面白し。殊に「梅取川にて」に挿める牛(牧童は此の張に非ず)など出色の出來なり。凡て人を驚くは拙なるにや、感し。

(女學雜誌)

●暮笛集

薄田泣菫著

社會の冷感なる、繪もすれば小説を讀んで或は作家其れ自身に迄批評を及ぼし、詩を稱するに或は詩人彼れ自身に迄批評を蒙らしめんとす、これ一種の弊風と云はざる可からざる也、若し此の流を以て押し行かば倫敦社會がバイロンの作を歡迎せるは寧ろ奇怪と云はざる可からず、我輩も泣菫を知るものにあらず、而して又眞卒に白狀すれば彼が作を餘り多く譽讃意味せるもの、あらざる也、我輩が泣菫を知れるは暮笛集を以て初めとす。

麗麗なる藤村の詩たに飽きる世界は、晩景を珍重せり、然れども變化する世界は變化なきものを好まず、世の風雲の潮に飽き、或は彼の詩は散文と相距ること遠からずとの評を下すに到る、勢ひ新體詩界は青年詩人に望みを置かざる可からざるに到りぬ、泣菫の如きは青年詩人として我輩指を屈するに躊躇せざる也、其聲は不平にして潮は悲憤を帯び、其句は短刀直入的にして、其詩は飄々たる春にあらす響る秋草烈日の姿を呈す彼の喜ぶの詩人にあらまじく悲むの詩人なり彼の笑ふの詩人にあらまじく悲むの詩人なり、其詩は深窓の佳人にあらすして貧苦に泣く小女をり其音は聲にあらすして杜鵑を聞くが如し、何を以てか而して云ふ、彼は學ぶ可き人謂る可き人知らず、よしや人ありとするも、彼は洵るに足る可きものと思はざる也、

彼れ「詩のなやみ」に於て歌て曰く、

こゝに風流の秀才あれ

われ膝折りて學はんは

こゝに有情の小女あれ

われ手をとりて洵らんは

世に秀才なく小女なく

われ唯ひとり物狂

彼は笑て世を見ること能はず、不平の眼を以て見る、所謂風流の秀才あり、有情の小女ありと雖も、彼が眼には才士秀才あり、小女情あるべく映せざる也、我輩は泣菫の人生觀を以て圓滿なるものと云ふこと能はず

彼は自ら一の鐘聲(チン)を聞き、世の不平不諧の元素を此の中に集め、以て自ら悲る、花を見るに彼は美を呼はんよりの響る死を呼び、死を呼ばず毒を呼び、毒を呼ばず惡魔を呼ぶ、彼が詩の傾向は其れ斯の如きものにあらざるなきか、然りと雖も我輩は泣菫詞に全然感服するものにあらざる也例令

心周章る依保姫が、旅の日せくかこの夕

人は夕飯は取る間を、花ごっこ、に散りこぼれ

痛ましい哉春の日の、快樂も土にかへるなり

睡る、花葉の下がくれ、亂れて細き燈火に

時流よして見入るれば、夢にぬれる翠等の詩の

花なき今も音を吹いて残れる春を焼かんとす

夏朝早く水くむと

かめを抱て走りしが

戸に泣く聲にかけ行けば

「許せ水無酔いでして

砂くも儘よ唯泣くな

髪には惜しき涙をと

言ふに可憐しやしやくりあげ

すかりて泣きし人は誰れ

秋の日小菊がくれ來て

手願の兎とらねと

歌をもよほで氣により  
 而傾ついで秋けるを  
 初葉つまむと圃にゆき  
 芋の葉影に耳を見て  
 抱きかへるに兄が身  
 願つき謝せし日は何日か。  
 長鷺風風ある放れ駒の  
 牝馬の遠目に狂ふ如く  
 雲の執清一つによりて  
 春の日ひねもす計を思ふ。  
 彼方に眠れる森のあなう  
 乳房によりこふ稚兒のまぐ  
 静に眠れる空の色も  
 機案にしみ行く此々くれ。  
 これは習慣並にまた  
 薄ら衣服をたちきれど。  
 厨女さめて寒惚顔  
 炭子追ふも絶へたるに。  
 花賣娘名はお京。  
 都に三歳聲かれて。

以上はこれ泣菫調の一斑を伺ふに足らん、我輩は其調を一々細論するものにあらずと雖も、泣菫たるもの長所あると共に、又或は改めて可なる

點を有せざるが、我輩は彼に之を屬す然りと雖も時に詩とメタファー(譬)を混同するとか如き傾向を示し、譬を用ひはんは詩を作さざるか如き趣を示す、譬は力あるか如くにして力乏し、我輩は泣菫の詩が事實(ファクト)に近接するを喜ぶと共に徒に譬を惜らすして事實を事實として歌はんことを怒む、彼が多く譬を借るの弊や流れて贅句を用ゆるの止むを得ざるに到らしむ、懼みて可也  
 (世界日本)

●泣菫と「暮笛集」

吉備 彌子

薄田泣菫氏が著作詩人として成功したのかしないものかに就いては、自分と議論が喧しい。或者は當今の文壇に於て藤村勝翠の二氏に發行するものだと云は、また或者は取るに足らぬ平凡詩人だと云ふ。前説は早稲田派によつて唱道され、後説は大學派の傳ふる所である。我は思ふ此説の孰れが是なるか知らぬが、先づ、單に其人の價値を論らばうより、其が作品を見た方が能く解るべきでないか。而して其作と云ふのは、これまで新小説などに依つて、世に紹介されたものもあるけれど、其はいづれも他のもの、各附合に過ぎない、單獨誌上に漏歩したもののないところか、今回發見された「暮笛集」といふのは、氏の作ばかりを裏めたもので、氏が一種の著述として公けにされたのは、これが初めてである。れば、氏が如何なる詩人であるか、乃ち成功したものであるか、未成功のものであるかといふことは、此一編の詩集に依つて判斷することが出来る。で、我は直ちに泣菫其人を云々するを欲せず、先づ此「暮笛集」を



研究をして、而して従ふ決することせしやう。ところで此「暮宿集」は、半の年から亥の途へかけ、わしかけ五年間に作られたもので、論中收むるところの詩五十篇、頁は百六十二頁である。これを分量から云ふと、當今刊行される詩集に比べて、決して寡小なものとは云はれない。この點から四詩を毎篇取出して、批判するのは、限りある紙上で到底爲し得られることではない。そこで只だ其中で善しと感したものを、また善しと感したものを數篇に就いて見ることにしやう。

草に眠れる旅客に與ふ

覺めを旅人日ざかりは  
越ゆるに熱き山路かな  
行方も問はじ名も問はじ  
只安らかにいなたまへ  
葉影の花も忍ばれ  
憂さもなげなる彼の寐顔  
紅もやしめる唇に  
亂れてかへる蝶の羽  
羽を障りて鼻前に  
心して來べやと胡蝶  
かの眞玉手にくらべても  
何れやさしの草枕  
天つ少女のそれに似て

顔にまこも花かづら

谷間の百合の露くみて  
染めて見ましの花笑や  
むしろ胸に添けても  
君と眠らん花葉も  
覺めを旅人日ざかりは  
越ゆるに熱き山路かな

粉屋の女房

野この山この谷この  
京へと問へば嶺三里  
粉屋の女房笑顔こく  
眉もうちふり道を長く

百合花

庭のかげの小百合花  
一夜のうちに蝶をうみ  
顔ひまの可愛うく  
ひねもす胸にいだきしが  
夏の光のみせたまに  
秋いて見ると手をとけば  
かはす諸羽のひら／＼と  
蝶は再びかへり來ず

わらわや情しき事してと

夜たゞ夢にもたれふし

身のおやまぢを悔ひ泣けと

蝶は涙びかへり來す

夜あけて見れば小風の

足に無残や老れたる

小百合白百合あゝそこは

狂ひてかよふ蝶一つ

先づ住いのを賜けるとこんなものだ。其想に於て、調に於て、姿に於て  
飲くるところのないものは到底もどめられないが、前ので日影に休息  
してゐる旅人の、何時の間にか疲れが出て来てつい眠つて居るのを勵り  
中のは道中にて行先の道程を尋ねたものに一寸騙みを付けさせ、後のは  
一羽の蝶が墓びに墓びてゐる百合との間を、人に邪尸されて隔り、明く  
る日戻つて来て、やれ嬉しやと思ふて寄つて見ると、折角大事にしてゐ  
た花は夜前狐の爲に蹂躪られてゐるので、悲哀の極、其處らあたりを狂  
ひまはるといふので、少くとも或一部の者には慰藉を與へることが出来  
る。中には百合花は燃えるやうな同情を寄せたのである。

夏の日日盛りに、路傍の日影の草の上に憩ふて居る旅人が、涼しい風  
に吹れて、心も研ゆ／＼としてあゝ好い心持だとな涼を感れて居ると、氣  
の弛みを思込んで來た睡魔の爲めにつひう／＼として、何時の  
間にか寐入つてしまつて居る。其處を自分が通り過ぎて、あゝ此處は野原

だのに何處の人か知らぬが、こんな所で寐て居るは可ない。それに未だ  
先達へ行くのであらうから、起して遣らう。と一旦は思つたが、餘りに  
心地よく寐て居るので、假か起すのが氣の毒になつて来て、否々、折  
角疲れを休めて居るのだから、起すまい。あたりまへならば、起して何  
處へ行くのか、また何處の人かも知れない。このよく寐入つ  
た姿を見てはそれは出来ない。もつとよく寐かして置きたい。此の世の  
中の凡ての苦といふものを忘れて居る寝顔を見ては尙のことだ。と擬手  
と其苦のなさうを寝顔を見て居ると、折から一羽の蝶が飛んで来て、旅  
人の朱い美しい唇を、花と間違へて唇めやうとする。あゝこれ／＼、折  
角よく寐入つて居るものを、羽でもあてゝ起してはならぬぞ。また其傍  
に咲いて居る草花は、いろいろ奇麗で、何時までもさうしておきたいが  
旅人よ、唇が瘦れを替すためならば、寝反して隣つて碎いたとて、何に  
惜しからう。まア／＼もつとよく寝て居て、目の弱くなるのを待つて行  
かつしやい。これが旅客に與ふの結構である。通常の人ならば、此眠つ  
た旅客を見たとて、あゝ馬鹿奴、こんな草原の中で寝て居やがらア。女  
と、唇口吐きながら、何の氣をしないでグ／＼行つてしまふのだが、そこ  
が詩人の詩人たるところで、たゞ路傍に眠つて居る旅人にまでもこの同  
情を寄せたのだ。加之に、蝶や花などの美しい柔しきものを捉へて來て  
蝶合したところ、これ詩人たる氏にあつてはじめて成し得ることである  
次に粉塵の女房は、遠い所から旅立し、野邊の山越え谷越えて、長い途  
を歩いて來たから、大分疲気が出て足も痛い、京へはもう何里であら

うか、と妻れて問ふた者は、威勢よく働いて居た女の、舉動もいそ／＼  
 笑顔よく、濼々して町等に散へたので、この勢ひに動まされて、今まで  
 萎れ沈んで居た旅客も馬み立つて行く云ふのである。これ儘かに疲れ  
 た旅人を勤ますに足りる。また百合花では、岩陰の百合へ載れて居る一  
 羽の蝶が、自分は餘りに可愛うてならぬので、その両の手を出して、掌  
 の中へ入れてしまひ、これで大丈夫とこんなもろ手を合して居ると、蝶は  
 外へ出たさに掌の中で羽をバタ／＼さして居る。さう何時までも際限な  
 く握つて居ては窮つてしまふ。それも可憐さうだりら放して遣らうと、手  
 を開けると、蝶は喜んで直さま何方へか行てしまつた。そしてもう蝶が  
 戻つて来るか／＼と思つて待つて居るけれど、更に戻つて来ない。蝶は先  
 の仕業に恐れてもう戻つて来ないのか知ら、これでは放して遣るではな  
 かつたに、惜しいことをしたものだと思つた。追付かない。其中に  
 どう／＼日は暮れてしまひ、翌朝になつて見ると、是はしたり、彼の蝶  
 か寐ふて居た百合は、悪業好の狐に蹂躪られて花は滅茶々々になつてし  
 まつて居る。あゝ蝶はこれを知つて居るであらうか、知らないであらう  
 か、多分知らないであらう。が、知つたならばどんなに歎くであらう  
 と、思つて居るところへ、昨日の蝶が版つて来て、あゝ懐しや百合花と  
 其美しい花に接吻をせやうと思つて寄つて見ると、無残や、花は滅茶々  
 々になつて居る。そこで、蝶の愕き、歎きといふものは如何ほどであら  
 う、慕うて／＼むたものが亡なつたから氣も狂亂。他へは行ないで其處  
 らわたりを狂ひ廻つて居る。あゝ狐が花を潰さなかつたならば、こんな

に蝶は歎くまいに。否や、狐も狐だが、それより昨日自分があんな悪  
 戯をして、蝶を恐れさせなかつたならば、始終傍に居てたのだから、こ  
 れはまでの悲哀いさせなかつたらうに。あゝ、あゝ、無益な事して餘計  
 な苦痛をさせるなど、かつ悲ふ、かつ歎くところ、これ前の二篇に優り  
 て美しきを感じる。其着想に於て、結構に於て、未だ満足は出来ないが  
 其情、其熱、共に十分である。  
 これでは、氏は早稲田派の説くが如く、藤原二氏に雁行し得る詩人かと  
 云ふに、決して然うでない。先づ次に論らうところを見て、而して後ち  
 決すること、しやう。

冬の歌

冬は来れり山越えて  
 里に入りたる旅人が  
 散り敷く森の下道に  
 鹿の角得たる幸聞きて  
 樵夫空笑顔朗明を  
 山に駈けたる噂ありし  
 薄き日影に茶の花の  
 こぼれ咲く頃時煮て  
 武者物語ひもどくに

矢開ふかく瀧に乗り  
 手拍子かろく打ちふれば  
 妹背に立ちて葉がるよ  
 夜か子割の鐘鳴りて  
 市姫領を引き去れば  
 小狐降りて下京の  
 月に研ねたる雪をふみ  
 隔もやあると味濁り  
 数珠腕懸たる戸をくぐる  
 吾輩持の戻り路  
 手がへり待ちて立てる時  
 流人領主を去る如く  
 吹き捲んじたる北風の  
 後姿さむら惜々と  
 森をめぐりて行くを見ぬ  
 かの鎗山に年木伐る  
 斧の響きか一しきり  
 霜を叩いて解まれば  
 世の寂寞の手に踏して  
 いかしめしい世際二十重  
 また雲賣うゝ茶に立てり

未だ列べるに浮出するが、拙劣のを擧げるとまアこんなものだ。これらは小學の三年生でも少しく新体詩に志しあるものは、屹度作出すに相違ない。讀んで茲ぞと感服する所もなければ、誦して聲調なく、味はうて趣味なしだ。驚駭粗淺、平蕪無味とは、これらの詩を評する適切な語である。尤も氏が名の今日の如く揚つたのは、こゝ一兩年の内で、此「藝館集」は未の年以來の作だから、中に「拙いのもあらう。か、何年何月の作とも無いからには、何れが何日の作やら分らぬから、先づ出版當時の兵を標準として云はねばならぬ。總じて氏の詩は理屈少く、面白くない。詩には何んでも狂熱といふものが必要で、遂に居りやごさ面白いが、悟つて仕舞つては面白いことも可笑いこともないのだ。我々は高遠な論議を兵に聽くのを要なければ、また幽玄な妙理を聞かうとも思はぬ。これらの事を聞かうと思へば他に其人あり、詩人たる兵に就いて獲やうと思ふのは、只だ一片の懸想で、これさへ得れば他に要求はないのだ。詩人に就いての世間よりの希望は、恐らくこれに過ぎない。然すれば、これを充すのが詩人で、詩人は何んでもそれを欲いではならない。されば氏はこれを全然欲いで居るか云ふに、決して然うではないが、此点に於ては詩村の方がはるかに優つて居る。それで世調に於ては如何かといふに、これまた遙く晩輩に及ばず。彼の雄略典雅なるに引替へ、此の信房賢才なる、逸も目を向うして詠ふことは出来ない。斯う云ふと全然探るところはないやうに思はれるが、否や然うでない、氏は詩人として最も必要である同情に富んで居て、其一たび意を激いだならば、如何なるも

のをも同化させる底の熱涙を貯へて居る。されば、其本來に於て詩人たるの資格は有つて居るが、未だこれを十分に發揮するの手腕を以て居るものと云はねばならぬ。だに依つて彼の大學派の唱ふるが如くに氏は平凡詩人でもなければ、また早稲田派の道ふが如く藤原二氏に雁行し得る詩人でもない。語を換へて云はゞ、氏は尙ほ成功の域に片脚を踏掛けたつゝ、あるものと斷言するを憚らない。如何に公平無私の眼を以て見るも此一編『暮笛集』に就てうかうには、藤原二氏の作とは、未だ其間に自づから徑路あることが知れる。

されど、兎に角前途有望の詩人に相違ないから、泣菫氏たるもの、尙ほ幾層の修養を積み、勉めて怠らずんば、氏が新壇に謳歌されることは、敢て難い事ではなからうと思ふ。

(山陽新報)

●暮笛集を讀む

山・中・北・清

泣菫子の著されました暮笛集に就て私文の意見を少々述べます、私が初めて子の作に接しましたのは新著月刊の朱菫集でした、これを幾度となく繰返して讀みました、其時私の感じた事は作者に眞摯の情を以てする事、從來の七五調を面目とする事、漢語を巧みに使用したる事、複雑なる假事を變更にして毫も贅せざる事、詩調唯麗にして加之も力ある事等でした、今暮笛集を讀むに及まして更に八六調を創始せられたる事を加へます而して前申した事を益々確めました。

集に載する所長短五十五餘篇、長篇に於ては尼が紅(百五節)兄と妹(七十二節)杯惜辭の上に於て、落想の上に於て大に敬服の外はありませぬ、今試に最も私の意を得ました者を並べますれば、清新なるは鶴鶴の歌、八六調に於ては蓮、桐葉、山雀、雀に於ては遊子調に於ては關山曲、輕妙なるは蕙可笑しや、粉屋の女房、自然を捉へたるは秋の歌、力の籠りしと覚ゆるは尼が紅、兄と妹、詩のなやみ、何事かと驚く思ひするは古鏡賦、詠歌、華燭臺杯です、

吾今朝山に分け入りて、

谷の小隊に唯一羽、

鋭き嘴に齧さきて、

巢をわむ振を認めしが、

へりて妹にさやくくに、

猶昔等をほやかろぬ、

(鴉鴉の歌)

詩味極盛、

われ身弱くて年若く、

唯世に出で、耻あるを、

顔青白き博士等の、

ひかる輝にぞ堪んや、

(兄と妹)

こゝろよし

世に無何有なく絶つてなく、

餘輝未劫につゞかんを、

あゝまよふ世の、  
銚を帯びたる汝底に、  
世の賦楽を染めいで、  
秘事をそかく水功の、  
遠き光を透かしみて、  
吾わが命の今更に、  
意ある如きは驚いて、  
獨り膝子をらすなり、  
見よ既に驚わり、  
酒が妾のこひしさに、  
桃の雷の紅どりて、  
日かげうづるよ白壁に、  
まづ燈りをむる懸燈や、  
やましさ情かな、  
(尼が紅)

こはこれ葉中目に開れたる二三を摘出したものです、猶此外に住句は非  
常に多くあります、又  
冬は来れり山越つて、  
里に入りたる旅人が、  
(五歌)

散り遠く森の下道に、  
鹿の角得たる幸聞きて、  
樵夫空兵衛朝明を、  
山に断けたる噂わり、  
の如き

夜か、子刻の鐘鳴りて、  
市廛、領を引き去れば、  
小狐群りて下京の、  
月に冴わたる雪をふみ、  
嵐もやわりと唯獨り、  
散珠降臨たる月をく、  
の如き如何に子が複雑なる親事に巧なるかを窺ふに足る、又六八調は最  
も注目すべき詩形であります、一般の成功は覺束なれと思ひます、併  
し鐘、杯は最も此種の事を唱ふに適切なるを覺わしました、  
今藤前集を繰返しまして私自身が権ぬ命は將來の子の詩境に於て必ず滿  
足するであらうと思ひます、が其中で竹耳或は雅言、力の重きに強くる  
助辭、杯を成べく避けたいです、先づ此位を止めます、猶ほ他日葉中の  
詩を詳細するの時があるでしょう

雨の夜提灯二階に持上りて



明治三十二年十一月十五日印刷  
明治三十三年五月二十日印刷  
明治三十三年五月五日再版印刷  
明治三十三年五月十日再版發行

幕笛集

定價金四拾錢

著者 薄田淳介

發行者 大阪市東區南本町四丁目十六番屋敷 金尾種次郎

印刷者 大阪市東區本町壹丁目三十番屋敷 淺野庄太郎

印刷者 大阪市東區本町壹丁目三十番屋敷 大阪國文社

著作權所有

發行處

大阪市東區南本町心齋橋筋角 金尾文淵堂書店

關西發賣元

大阪市南區心齋橋筋一丁目 松村九兵衛  
大阪市東區備後町一丁目 盛文館書店

關東發賣元

東京市神田區表神保町 東京堂書店  
東京市日本橋區 林手次郎

薄田 泣 董君新著  
滿谷國四郎君 畫

新體  
詩集

# 行く春

クロス綴 寸珍新意匠美装  
アトタイプ版入

定價 金三拾五錢 郵税 六錢

在五中將の咏に曰はく「花に厭かぬ嘆さはいつせしも  
かども今日の今宵に似る時をなき」と。行く春は花に厭  
かぬ嘆さをのべたるもの、これを披いて錦鏑の眺めあ  
るにもあらねば擲ちて金石の響するにも非ず。譬へば  
夕暮の風に揺ぐ蘆の葉の如く微韻いさゝか詞流の邊り  
に趣さを添へ得べくば作者の望足る。吟身未だ愁去ら  
ず煩らへるを慰む可くもあらねど許し玉は、花落ちて  
春辞するの夕盃をふくみて君と共に涙を揮ふを辭せざ  
るなり。包む所牧童歌、石像賦、海棠歌、老鶯、郊公賦、  
放金朱鳥、悼情死歌、暮春頌、巖頭沈吟、夕の歌、嬌語絶  
句三十篇以下断片十數首、詩題の多くが關はる季節に  
よりに名づけてゆく春といふのみ、

浩々歌客君著  
丹羽默仙君畫

文學  
雜著

# 詩國小觀

寸珍美装 定價 金卅五錢  
郵税 金六錢

浩々歌客氏の文學雜著を收集す、要目を舉  
ぐれば小説に雪だるま、蘆の處士、老僕、  
利那、明暗、刀上輩、田園雜興、霞浦一瞥、  
夜半逍遙、雲濤及老天あり或は實寫或は架  
空皆著者の冥想觀念を寓せたるものなり其  
他韻文にふくろふ、故郷あり、時文論評に  
は當代の作家に對する細論あり、著者が詩  
國に於ける漫遊起程の消息は此篇に見ると  
を得べし



月郊高安三郎君著  
中村不折君畫

社會  
小說

# 金字塔

頗美装  
イフ版入  
定價 金卅五錢  
郵税 金六錢

維新以來社會の變遷を景として學者  
政事家宗教家資本家勞力者華族貧民  
貴女工女孤兒等出入し主人公は千古  
の疑問に苦しむ者悲劇か喜劇か喜悲  
劇か悲喜劇か文學の革新を望む者人  
生觀を求むる者社會問題に注意する  
者は胸を打つ處あるべし

月刊文學雜誌「ふた葉」は  
爰に御慶事奉祝の小説  
美文韻文を蒐めて臨時  
増刊をなす、皆當代大家  
名家五十餘名の稿に係  
る、每號掲載の要目は以  
下之れを見るべし

定價 金十二錢  
郵税 金一錢  
長春譜  
五月廿五日發行  
ふた葉  
第三卷三號  
五月廿日發行

## 長春譜

ふた葉第參卷第壹號

卷頭の辭

關西文壇の振興がわが帝國の文壇に趣味を普及するの先鞭にして、俗臭紛々たるこの大阪に自然的感化を及ぼすの曙光なり。今やわが文界の新機運の多年鬱結せる寂寞の聲を破りて、新たなる年と共に大に勃興せんとする傾向あるの時に際し、弊堂敢て自からはからず、聊か營利の外に起ちて、こゝに「ふた葉」の改善を企圖する所以のもの豈他あらんや。然りと雖も弊堂の微力と無學を以てして到底この素懐を充たすべくもあらず、大に先進知名の大家の翼賛と斯文に熱誠なる青年文士諸君の力を仰ふがざるべからざるものあり、依りて本年よりハ從來の「ふた葉」に向つて全力を注ぎ新たなる面目と希望とを以て一大革新を施し、聊か諸君が縱横馳騁するの舞臺を供せんとす。若夫れ馬を浪華文壇の陣頭に建て、新文學の覆轡を握らんは一に諸君の爲すがまゝに任ぜんのみ。弊堂はかゝる熱誠なる文士の爲めに奮つてその紙面を割くを惜まざるものなり希くは弊堂微表のある所を容れて、層重の翼賛と助力とを垂れ給はんことを。

庚子新正

文淵堂主 金尾思西

謹白

ふた葉第三卷第壹號要目

◎表紙	赤松麟作
◎小説	泉鏡花 一 後藤街外云 梁田晴嵐云 佐野天聲云 齊藤溪舟云 齊藤默蛙云
◎讀文	薄田泣菫云 山本露葉云 藤谷小波云 水落露石云 與謝野鉄幹云
◎雜錄	破學子七 不致庵云 黑犬子云
◎評論	大荒樵者云 出門一笑云 のツべら坊云 平尾不孤云 曲輪多史云 山中北清云
◎青年讀書社會に告ぐ	
◎文壇新年	
◎文壇の大掃除	
◎某に答へて關西文壇の振興策を述ぶる書	
◎與治雷庵關西文壇之革命書	
◎募笛集を讀む	
◎報	
◎文學同好會興る	
◎其他數件	

明治三十二年文藝界一覽表

たふ葉第三卷第二號要目

◎表紙

花見

◎小説

夜泣

近鏡

◎評論

東の邊りにて

森の邊りにて

二つの果

南畝の人

俳句

短歌

漢詩

◎雜錄

松の内日記

袖日記

静思二三

清閑寺の秋

走馬燈のをしへ

◎評論

文學偶感

思西君に與へて關西文壇の振興策を謀る書

◎彙報

文學同好會第三回

◎其他數件

赤松麟作

廣津柳浪

赤木巴山

與謝野鉄幹

山本露葉

兒玉花外

桑田春風

藻田董五

青木月兔

中井浩水

高松茅村

小川煙村

三木天遊

文學同好會

網島梁川

網島梁川

中村春雨

中村春雨

下島

下島